
レフリゲリウム物語

くまミニ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レフリゲリウム物語

【Nコード】

N7407C

【作者名】

くまみー

【あらすじ】

それは、小人のラッセンと、病身のアンジェレッタのお話でした。でも…違います。それは、ラッセンとアンジェレッタのお話だったんです。二人は、様々なものに出会いました。そして…その旅は永遠に続く『夢』になったのです。

1・天使の住む家

…真っ暗です。ここには、何も…星だつて、見えていないんです。

いったい、何処なんでしょうか…

…ふわっ…

(あっ！)

目の前で、長い髪の毛が揺れています。自分と同じ黒髪をした女の子が、少しずつ離れていこうとしているんです。

(あれは…)

駆け始めた後ろ姿が、青白い光に照らされています。ええ、そうです。見間違えるはずありません…

「姉さん！ エルサ姉さん！」

大きな声で叫んでいるんです。聞こえないはずがないんです。なのに、どうしてエルサ姉さんは立ち止まってくれないんでしょう。

「待って！ 僕も行くよ」

…でも、足は少しも動いてくれませんでした…

(ラッセン、待っててね。すぐにネクトルの実を採ってきてあげるから)

「止めて、エルサ姉さん！」

一瞬、ラッセンはにっこり微笑んでくれるエルサ姉さんを見た気がしました。

その時、真っ暗な闇の中に、大きく光る二つの星が浮かび上がったんです。

…いいえ、星ではありません。あれは…

「危ない！」

ネコの目です。冷たく輝いた、残忍な瞳…

「エルサ姉さん…！」

力いっぱい、ラッセンは叫んでいました。本当に、力いっぱい…

……次に見えたのは、鮮やかな赤い空でした……

……

「うわああっ！」

粗い生地 of 掛け布団を握り締めながら、ラッセンは跳ね起きてしまいました。体中に、冷たくて気持ちの悪い汗が流れています。……寒いんです。どうしても、体の震えを止める事が出来ません……

小さくなってきたベッドの上で、ラッセンは大きく息を吸い込むと、顔を布団に押し付けました。

……駄目です……涙は、布団に吸い込まれるよりも早く溢れてきます……

しばらく泣き続けた後、ラッセンはようやく顔を上げる事が出来ました。濡れた黒い瞳が、すぐ横にしつらえたままの、もう一つのベッドに向けられます。天上から吊り下げられたランプの、抑えられた明かりに照らし出されるそのベッドには……もう、眠る人もいないんです……

……また、ラッセンの幼い頬を、白い滴が伝い落ちていきます。ラッセンはきゅっと手を握ると、次にはベッドから飛び降りていました。そして、そのまま粗末な木の扉を勢いよく開けると、まだ朝の来ない森の中へと走り出してしまいます。

……まるで、何かから逃げようとしてもするように……

遙かな頭上に見えている青葉が、朝一番の光に誘われて緑色に輝き始めています。虫達も、うつすらと森の中に入り込んできた波に気付いて、歌の練習を始めています。そんな彼等をからかうように、小鳥達は見事な囀りをそこかしこで披露し始めました。

……でも、ラッセンにとって、それらは何の慰めにもならなかったんです……

古く苔むした切り株を背にして、また少し、泣いてしまいます。

もう、幾度泣き止もうと決心した事でしょう…十歳なんだから、もう、小さい子供みたいに泣いたりしないんだ、って…でも、いつも涙は裏切って流れ出すんです…

気の早い光の泡が、切り株にある扉の上で踊っています。ぼんやりと、何も考えないように、ラッセンはその泡を視線で追っていました。

その時、不意に上から力強い羽ばたきが聞こえてきます。でも…
…ラッセンは、逃げる気ありませんでした…

「…また、眠れなかったようね、ラッセン……」

優しい声がします。すぐ傍に舞い降りてから、初めてラッセンは瞳を向けました。

赤くて丸い目が、そつと見守ってくれています。羽の縁は赤茶色をしていて、首の両側には青と白の綺麗な模様が編み込まれているんです。その人の体は、自分の背丈の二人分はあるでしょうか。いつも気にしてくれる、キジバトさんです。

ラッセンは、頬に付いた涙の跡だけを拭って、正直に頷きました。キジバトさんは、痛ましそうにそんなラッセンを見ると、小さくデポウと啼いてしばらく切り株の周りを歩き回りました。

「ねえ…ラッセン。どうかしら…引越しをしてみない？」

「…え？」

突然の言葉に、驚いてしまいます。ですが、キジバトさんとはとても真剣にラッセンを見ていました。

「もう、ここには住めないでしょう？ 辛くなるものばかり、あるんですもの。だから、そういったものは全部ここに置いて、引越しをしてしまうの。人間の家だけど、いい所を知ってるのよ」

「だけど、僕は…」

「重い荷物なら、私が運んであげるわ。…ね？ そうしなさいよ」
「キジバトさん……」

じっと、見つめてきます。引越したなんて…そんなにすぐ、決められません。確かに、ここには悲しいものばかりがあります。何を

見ても、思い出してしまうんです…でも、それらを全部置いていくなんて……

「…僕には、分からない。…考えておくよ。ありがとう、キジバトさん」

「本当に、考えてみて。私なら、いつでも手伝ってあげるわよ」

温かな声でそう言うと、キジバトさんは羽を広げて舞い上がりました。

「夕方、また来るわ」

柔らかな言葉が降り注いできます。でもラッセンは、何も応えずに飛び去っていく後姿を見送るだけでした。

初夏の緑葉の隙間から覗く空が、だんだんと白くなってきています。溢れてくる光に乗って、涼やかな風は草の強い薫りと共にラッセンを包み込みました。何だか、とっても新鮮な気分なんです。何かが、胸の中で弾けようとしているんです。

ラッセンは小さく頷くと、切り株の扉を開け、辛い思い出ばかりの詰まった家へと入っていきました。

………

さあ、キジバトさんに運んでもらう荷物は、これでやっと終わります。ラッセンは、今度は自分の運ぶ荷物をまとめようと家の中に入りました。

何だか、ぽつかりと空き地が出来たみたいです。エルサ姉さんの物は全て置いていくのですが、それでもあちこちに《穴》が見えます。小さな衣装ダンスの跡や、解体したベッドの跡。そこだけが、何処か白くて不自然なんです。

（もう、ここは僕の『家』じゃなくなっただね…）

ええ、そうなんです。ここには、エルサ姉さんと一緒だったラッセンが住んでいたんです。それは、《今》の自分とは違うんです………溢れそうな涙を感じて、ラッセンは慌てて簡単に荷物をまと

めました。ほとんどの物はキジバトさんが運んでくれましたから、持っていくのは小さな袋一つだけです。しっかりと紐を締め、肩に担ぎ上げると、ラッセンは急ぎ足で扉を抜けようと思いました。

でもその時、目に入っただけです。残されたベッドの脇にある、机の上の可愛い髪飾りが……

不意に、豊かな黒髪が目に映ります。その黒い流れの中で、髪飾りはそこにある事が当然であるかのように、白く眩しく輝いているんです。これは、ラッセンが何ヶ月もかけて作った物です。とっても喜んでくれたエルサ姉さんは、いつもこの髪飾りを左耳のすぐ上に留めていました。

…そう、あの時も……

（エルサ姉さん…）

駄目です、今にも泣き出してしまいそうです。ラッセンは齒を食いしばって、敷居を越えようと思いました。

……でも、出来ないんです。体が、少しも動いてくれないんです……必死で耐えようとする心に反して、ラッセンの右手は机の上に伸びていきます。そして、その指先が髪飾りを掴むや否や、ラッセンは外に飛び出していました。

もう、何も言いません。ラッセンはしっかりと握った髪飾りを、黙って袋の中へと仕舞い込んでしまいました。

大きく、でも少しほっとした溜め息が零れます。今は落ち着いた気分で、ラッセンは扉を閉めてしまいました。

気が付けば、夕暮れ時から始めていたのに、もう朝になろうとしています。愛らしい枝葉の向こうでは、星がうつすらと光を弱めているんです。すぐにでも、朝の早いヒバリは消えかかる星に向かって舞い上がるでしょう。

ラッセンは、改めて草の間から見える、住み慣れた古い切り株を振り返りました。厚い深緑の苔に覆われたこの家とも、今日で別れです。…もう、二度と戻ってくることはないでしょう………そんな事をすれば、どうしてもエルサ姉さんの事を思い出してしまうので

すから……

もう、泣きたくはないんです。ええ、もう、泣きません…

「…じゃあ、行ってくるね。姉さん」

ロートウ川を越えた所にある、スィールと言う名の人間の町に住む事になったんです。ラッセンにとつては、初めての人間の家です。でも、キジバトさんは何も心配ないと言ってくれています。それに、何よりも大きな屋根がありますし、水も食料もすぐに手に入るんです。一人になったラッセンには、それはとても大切な事でした。やがて来る冬にも、きっと凍えなくて済むでしょう。

（だから、安心してくれていいんだよ。エルサ姉さん）

一緒に行くんだったらいいのに…ちらつと、そんな考えが浮かびます。

でも…それは無理な話です……

再び濡れ始めた瞳で、ラッセンは最後にもう一度切り株の扉を眺めると、そのまま背中を向けて歩き出しました。

一度も、振り返る事はありません。明日の夕方には、きっと荷物の整理も終わっていることでしょう。

………

白いカーテンが、朝の光を受けて輝き出しています。部屋の中にある、たくさんの本が並んだ棚も、もう、ぼんやりと暗がりから見えってきているんです。

アンジェレッタは、いつものようにベッドから起き上がると、静かに淡い黄色の肩掛けをしました。そして、ゆっくりと窓辺に近付いて…そつと、カーテンを引きました。

素晴らしい光の波が、アンジェレッタの純白の寝間着を照らし出します。青白い腕や、細い足も、この時ばかりは健康を取り戻した気がします。

「素敵な青空…」

澄んだ声が、幼い唇の間から流れ出します。アンジェレッタは、微かに笑みを浮かべると、音も無く窓を押し開けました。

クリーム色をした石壁が、金色に燃え上がっています。すがすがしい空気を胸いっぱい吸い込むと、アンジェレッタはその黒い瞳をずっと高いところにある空へと向けました。

もう、あの空の下に出歩く事が出来なくなつて……いいえ、部屋からさえも出られなくなつて、六年になります。今度の誕生日で、アンジェレッタは十二歳になるんです。気分が良くて、熱もあまり無ければベッドからは出られるんですが……もう、アンジェレッタには、すっかり今の生活が『当たり前』になつてしまっていました。

下の方で、扉の開く音がします。お父さんです。アンジェレッタが良く知っているように、今日もその音と一緒に左隣のスコットさんが出てきました。

まだ少し、朝の光を受けるには間がある細い石畳の道で、いつも通りに挨拶をしています。そして、これもいつも通りに、アンジェレッタに帽子を振ってくれました。

「おはよう、スィールの可愛い天使さん！」

「おはようございます、スコットさん」

陽気な言葉に、思わずにつこりしてしまいます。例え、いつも同じ言葉でも、嬉しいんです。

どんな時でも楽しそうなスコットさんが教会の方へと曲がつてしまつと、今度は前のタックさんの家が動き始めました。その物音が大きくて乱暴だと、いつもアンジェレッタは、はらはらしてしまいます。そんな時は、きっとタックさんとチエルナさんは喧嘩をしているんです。

ああ、でも今日は大丈夫みたいです。さつと黒い扉が開いて、タックさんが飛び出してきました。でも、どんなに急いでいても、必ずタックさんはアンジェレッタを見上げてくれます。

「やあ、おはよう、アンジェレッタ」

「おはようございます、タックさん」

「ほら、急ぎなよ、あんた！」

威勢のいい声が、追いかけてきます。タックさんはそれを聞くと、慌てて坂を下っていつてしまいました。

「おはよう、アンジェレッタ。今日は気分はどうだい？」

家を出てそんなタックさんを見送った後、チエルナさんは優しく尋ねてくれます。アンジェレッタも、そっと微笑んで応えていました。

「ええ、とてもいいんです」

「そりゃあ、よかった。天使はいつも笑ってくれてなくちゃね」

そう言つて、豪快に笑い出しています。本当に、びっくりするような人なんです。アンジェレッタは、朝のこの挨拶だけで、どんなに辛い事も夕暮れ時まで忘れていられるんです。

今度は、お父さんです。今日も山に木を伐りに行くんです。

「行ってくるよ、アンジェレッタ。無理はしちや駄目だぞ」

「はい、お父さん。行つてらっしゃい、頑張つてね」

何もかもが、いつもと同じなんです。ほら、ヴェルンドさんも、ロートウ川から戻つて…

どうしたんでしょう。少し、俯きかげんです。アンジェレッタは、透き通るような青い瞳を心配で翳らせながら、胸に手を押し当てて待っていました。

「…おはようございます、ヴェルンドさん」

「ああ、おはよう」

そのまま、坂を上つてしまひそうでしたが、ヴェルンドさんはアンジェレッタの辛そうな顔を見て立ち止まってくれました。

「今朝は駄目だったよ、アンジェレッタ。ほとんど魚が獲れなかったんだ…」

「…今日は、お魚さんの機嫌が悪かっただけです…明日はきっと、たくさん獲れると思います。ヴェルンドさんなら、大丈夫です。だから…元気を出して下さい」

「アンジェレッタ…」

心から、心配しているんです。そんなアンジェレッタの姿は、声に出した以上の事をヴェルンドさんに伝えていました。

ふっと、険しかった顔が優しく緩んでしまいます。ヴェルンドさんは、柔らかな声でアンジェレッタに言いました。

「有り難いことだ。アンジェレッタがそう言ってくれると、明日は本当に獲れそうな気がするよ。やっぱり、アンジェレッタは俺達の天使だな」

「そんな…」

毎日の事ですが、これでは褒められ過ぎというものです。

（わたしなんて、何も出来ないのに…）

アンジェレッタは知らなかったんです。どれだけ、みんながアンジェレッタの姿に安らぎを得ているのかを。確かに、病気で痩せていますし、元気だとはとても言えません。でも、『何か』があるんです。

「おはよう、アンジェレッタ。よく眠れたかい？」

外階段のある家から今出てきたばかりのフレッドさんは、かつてみんなに、それはアンジェレッタの真心だと言っていました。

「ありがとうございます、フレッドさん。今日は、気分もいいんです」

「そいつはいいな。よし、じゃあ今日は楽しくなる曲でいこうか」
綺麗な髪をしたフレッドさんは、すぐに家の中に入ると竖琴を持ち出しました。やがて、その指先からは素敵な音色が風に抱かれて広がっていきます。

アンジェレッタは、温かな日差しにそっと包まれながら、静かに耳を澄ましています。その時、一羽のキジバトさんが、すぐ窓の下にある庇にとまったんです。この鳥も、フレッドさんが竖琴を奏でてくれている時の常連さんでした。

「キジバトさん。今日は、どんな楽しい出来事を運んでくれるの？」
いつも、そうです。キジバトさんは灰褐色の首を僅かに傾けて、まるでアンジェレッタの質問に応えてくれるかのように啼いてくれ

るんです。小さく、そつと優しく…

そんな仕草と『言葉』に、アンジェレッタの胸は少しときどきしてしまいました。いったい、どんな楽しい事が起こるんでしょう？今日は、ずつと熱が下がったままなんでしょうか。それとも、発作も無くて静かに一日を過ごせるんでしょうか…

ゆつたりとしたフレッドさんの音色は、そんないつもと変わらないうアンジェレッタの朝をそつと見守り、清澄な陽光へと溶け込んでいきました。

今日は、キジバトさんが教えてくれたように、発作も無い穏やかな一日でした。ですから、アンジェレッタは、ベッドの上で窓の外ばかり見ていたんです。

もう、部屋の中は薄暗くなっています。幾つか並ぶ本棚も、ぼんやりと煙って見えるんです。アンジェレッタは、夕陽が残してくれた茜色が全部空から消えてしまうと、小さく溜め息を吐いてしまいました。

いつも、そうなんです。朝はあんなにも素敵な気分なのに、夕方になると悲しくなってくるんです。今日も、結局はこれまでの『毎日』と同じ一日だったんです……

発作がなくて、気分が良くても…アンジェレッタには本を読むか窓の外を見る事しか出来ませんでした。誰もこの部屋には入れてもらえないので、この六年間というもの、アンジェレッタはお母さんとお父さん、そしてお医者さまとしか近くでお話する事はなかったんです。

どんどん、部屋の中も外も暗くなっていきます。アンジェレッタは、その綺麗に澄んだ青い瞳を悲しみに染めながら、もう一度溜め息を吐いてしまいました。

灯りも点けずに、細くて青白い腕を傍の台へと伸ばします。そこには、オルゴールがあるんです。アンジェレッタは、いつも眠る前にはこのオルゴールを聞くようにしていました。とっても悲しくて、

でもとっても透き通った音楽は、こんな夕暮れのアンジェレッタにぴったりのものなんです。

静かな音色が流れ出します。射し始めた月明かりの中で、銀色の踊り子がゆっくりと回り続けます。

アンジェレッタはじつとその銀色の煌きを追いかけた後、黙って櫛を手にして背に流れている黒髪を整えました。

やがて…音の葉が緩やかに床へと舞い降りようとする頃、アンジェレッタはいつもと同じようにベッドの上で目を閉じました。

.....

どれくらい、時間が過ぎたんでしょう。ゆったりとした黄金色の川に身をゆだねていたアンジェレッタは、何か微かな物音に気付き、その可愛い瞳をうつすらと開けました。

(……！)

…床の上の…あれは、何でしょう。窓から射し込んでくる銀の月の光の中で、黒くて小さな影が踊っているんです。古く色褪せた床板が青く輝いている中で、その影はただひたすらに舞い踊っていました。

ベッドに横になったままで、アンジェレッタは息をする事も忘れてしまいます。…これは、『夢』なんでしょうか？

熱の下がった日にだけ掃除する床の上で、影はくるくると滑っています。とても素早いんです。もう、今ではアンジェレッタにも分かっていました。その小さな影は……人間と同じ姿をしているんです。小人なんです！

自分に良く似た、濃い黒髪をしています。短いその髪の毛の下からは、ときどき月明かりに照らされて鼻や口までが見えているんです。

…でも……どうしてか、アンジェレッタにはその小人が悲しんでいるように思えました。とても素晴らしい踊りをしているのに、何

処か寂しそうですねです。

いつしか、アンジェレッタの目は深い哀しみに彩られていました。その小人は、自分よりも少しだけ年下のように見えます。アンジェレッタは、その辛そうな様子に思わず口を開いて声をかけようと思いました。もう少しのところで止めてしまいました。だって…恐がらせたくはなかったんです。きっと、この小人の男の子は、自分が目を覚ましているなんて思ってもいないでしょう。

その時、急に空の月が雲に隠されてしまいました。窓の形に切り取られた床の上の光も陰り、消えていこうとしています。銀色の波が引いていくと、小人は踊り舞う事を止め、とぼとぼと部屋の隅へと歩き出していました。

じっと、優しさに満ちた瞳が追いかけます。その小さな男の子は、やがて本棚の隙間にあった古いネズミの穴に入ってしまった、もうそれからは戻ってきませんでした。

しばらくの間、動く事が出来ません。ベッドの上で身を支えながら、アンジェレッタは大きく息を吸い込んで……そして、ぽーっと吐き出しました。青白かった顔は、ここ何年間も見られなかったくらいに明るく輝いています。とっても素敵な事が起こったんです。ぜひとも、アンジェレッタはあの小人の男の子とお友達になろうと決めてしまいました。

（明日の夜も、来てくれるかしら…）

やつれた頬に嬉しそうな笑みを浮かべて、もう一度アンジェレッタは眠ろうと横になりました。そっと、目を閉じます。

…月の光が床の上に戻ってきた時、その小さな唇の間からは、安らかな寝息が漏れていました。

さあ、ようやく朝になりました。いつものように、アンジェレッタは肩掛けをすると、窓辺に近寄り外を眺めました。

スコットさんが、お父さんと挨拶を交わしています。昨日と全く同じように風景は流れているんです。ほら、ヴェルンドさんも今日

は嬉しそうな顔で話しかけてくれます。アンジェレッタは、素直な喜びと共にそんなヴェルンドさんを坂の上まで見送りました。

でも、やっぱり何かが違うんです。いつもと同じようにフレッドさんは豎琴を奏でてくれます。あのキジバトさんもその傍で耳を傾けています。でも、やっぱり何もかもが違って見えています。フレッドさんにお礼を言って部屋の中を振り返った時、アンジェレッタはちょっと心配そうに本棚の隙間に視線を送りました。

昨夜の小人の姿が、鮮やかによみがえってきます。心配そうだったアンジェレッタの頬にも、知らずに優しい微笑みが浮かび上がっていました。

どうすれば、あの男の子とお友達になれるでしょう。白い寝間着のままでベッドに戻った後も、ずっと考え続けます。でも、あまりいい考えは浮かんできません。

ずっと、ずっと真剣に考え続けます。お母さんが、とても気分の良さそうなアンジェレッタに驚きながら朝食を用意している間も、昼食の片付けが終わった後も、まだアンジェレッタは考えていました。

あれもこれも…やってみたい事はたくさんあります。でも、驚かせてしまつて、もう会えなくなつては困ります。アンジェレッタは、あの小人の男の子とお友達になりたいだけなんですもの。

夕食が並ぶ頃になって、ようやくアンジェレッタは決めました。ちよつとだけパンをちぎつて、オルゴールの乗った台の引き出しに隠してしまします。それから小さな可愛い紙を取り出して、アンジェレッタはそこに細い文字を書き始めました。

少し悩みましたが、すぐにペンを置きます。一度だけ読み返した後、アンジェレッタは満足そうにくすくすと笑い出しました。これなら、きつと怒らせたり、怖がらせたりしないはずです。

その紙もパンと一緒に仕舞つてしまつと、アンジェレッタはベッドの上から窓の外を眺めてときどき胸を高鳴らせていました。

本当に、お友達になれるでしょうか…

夕食を、お母さんが片付けてしまします。その足音が階下に消えてしまうと、びっくりさせないように今まで近寄らないでいたネズミの穴に、アンジェレッタはそっと近付いていきました。

本棚の隙間、ネズミの穴の入り口に、さっき隠したパンと紙を静かに置きます。

（あの小人さんが、読んでくれますように…）

小さな胸でそう願いながら、アンジェレッタは再びベッドに戻って横になりました。

お父さんが、お母さんと一緒にお休みを言いに来てくれます。その後で、灯りが消されます。

今日は、長く起きてはいけません。目が覚めている事に気付いたら、きっと小人の男の子は出てきてくれないでしょう。

でも…困った事に、そう思えば思うほど、眠れなくなってしまうんです。

アンジェレッタは、温かな微笑みと共に、明日起こっているかも知れない出来事を思い浮かべていました。

しばらくして…月窓からそっと部屋の中を覗き込んでいました。その柔らかな銀の光が、暗闇の中の可愛い寝顔を浮かび上がらせています。

オルゴールを聞く事も忘れ、ようやく眠りに就いたアンジェレッタの頬には、優しい微笑が残ったままでした。

.....

……駄目です。せっかく新しい家に引っ越してきたのに…

…一人で、部屋の中にある事が出来ないんです。新しい家は、一人で住むには少しばかり大きくて…目は、どうしてもエルサ姉さんがいたかも知れない場所に向いてしまふんです…

いるはずがない事は、よく分かっています。昼の間は、食料を集めに行ったりして忘れる事も出来るんですが…夜、一人になると、

どうしても思い出してしまっんです。

「エルサ姉さん……」

ずっと、二人で暮らしてきたのに……どうして、エルサ姉さんは自分を残していつてしまったんでしょう……

ラッセンは深くて重い溜め息を吐くと、作りたての椅子から腰を上げました。今夜も、あの女の子はぐっすりと眠っていることでしょう。少しだけなら、人間の住む部屋に入っても危険はないはずで。それに、キジバトさんもあの子にだけは、例え見付かつて大丈夫だと言ってくれていました。

新しく付けた扉を抜けて、少し湿り気のある段を二階へと上って行きます。随分と遠いのですが、一階で暮らす人間の世界に入るよりは安全なんです。しかも、その部屋へと続く壁には、ちょうどいい大きさの穴をネズミが開けておいてくれました。

「あれ？」

その出口を、何かが塞いでいます。どこかのネズミが引越してきたんでしょうか。それとも、ネコでしょうか……

素早く、階段の隅に身を潜めます。でも、少しも黒い物体は動くとはしません。風も動きませんから、呼吸もしていないようです。独特の臭いや低い唸り声も、ラッセンには感じ取る事が出来ませんでした。

しばらくの間待っていました。ようやく少しずつラッセンは動き始めました。用心しながら、一段ずつ近寄って行きます。あの人間の女の子が、何かを本棚の隙間に落としたんでしょうか。そう言え、いつもはほとんどベッドから動こうとしないのに、今日はどうしても気分良さそうに歩いていましたっけ。

（何か、便利な物だったらいいな）

出口までもう少しという所で、不意にラッセンは足を止めました。甘い香りが漂ってきたんです。今はもう、ラッセンにも分かりました。あれは、大きなパンの塊なんです。

慌てて走り出そうとしたんですが、その動きは途中で止まってし

まいます。ラッセンは、少し厳しい目でその黒い影を見つめています。どこかに、罨があるかも知れないんです。

でも…どれだけ目をこらしてみても、床の上にあるのは自分と同じくらい大きなパンと、一枚の紙切れだけでした。

そつと、音も無くラッセンは部屋の中に出ました。慎重に辺りを見回した後、まず、紙の方へと近寄ります。窓辺から射し込んでくる淡い月の光でも、そこに書かれた文字は読む事が出来ます。人間の言葉と文字を知っているラッセンは、その紙に書かれてある内容を、小さく声に出して読み上げました。

「昨日は、素敵な踊りを見せてくれて、ありがとう。あなたに会えて、とても嬉しかったです。贈り物を受け取ってもらえますか？わたしの名前はアンジェレッタです。あなたの名前も、どうか教えて下さい」

しばらくの間、何も言えません。とつても、とつても驚いていたんです。まさか、人間の女の子に見られていたなんて…しかも、贈り物までくれるなんて…

人間は、とつても危険な動物です。いつも、罨を仕掛けて小人を捕まえようとするんです。そんな恐い話を、何度聞かされてきたことでしょう。このパンの中にも、毒が入っているかも知れないんです……

ラッセンは、それでもパンの方に近付きました。その影から、女の子のベッドを見てみます。でも、アンジェレッタは、今日は眠っているようでした。

緊張と恐怖の入り交じった顔で、今度はパンを見上げます。本当に、食べても大丈夫なんでしょうか。キジバトさんは、アンジェレッタはとても優しく素敵な子だと言っていました。ラッセンがこの一週間見てきた限りでも、あの女の子は自分を捕まえるような人間には見えないんです。

そつと、ラッセンは腕を伸ばしました。

…少しだけ、ちぎってみます。

ひとしきり、その欠けらを見回した後：体中を細かく震わせながら、ラッセンはそのパンを口に入れてしまいました。

しばらく、待ってみます……

でも、何も起こらないんです。やっぱり、これは本当の贈り物だったんです。ラッセンは喜んで飛び跳ねると、急いでその贈り物を小さくし、下の自分の家へと運び始めました。

大きなものでしたから、全てを運ぶのは一苦労です。でも、それも終わると、ラッセンは今度は布に包んだ大きな炭の欠けらを両手で抱えて、女の子の部屋に向かいました。

アンジェレッタの書いてくれたお手紙には、まだ下の方に余白が残っています。ラッセンは、そこに歩きながら力を込めて、一生懸命文字を書きました。

「おいしいパンを、ありがとう。僕の名前は、ラッセンです」

少し字が曲がっていますが、人間の大きさに合わせるんですから仕方無いでしょう。ラッセンは一度読み返した後、満足そうに大きく頷きました。

もう、今夜は踊らなくてもいいでしょう。いいえ。ラッセンは、もう踊りに来た事なんて忘れているんです。さっきまでの悲しみなんて全て洗い流して、ラッセンはパンが待つ家へと戻って行きました。

.....

まだ、朝の光は地平から覗いてはいません。ロートウ川で漁をしているヴェルンドさんだって、網を上げ終えてはいないでしょう。でも、それでも待ちきれずに、アンジェレッタはベッドから起き出してしまいました。

今まで、何年間も見せた事が無いほどに、生き生きとした目をしていきます。まるで、病気である事など忘れているかのようです。熱も下がり、気分がよい日にだけベッドから出る事を許されているん

ですが…

薄明かりの中、ぱつと見ただけでパンが無くなっている事が分かります。嬉しくて幸せな笑顔が、抑えられずに満面に広がってしまします。でも、弱った足では小走りすら出来ません。心は急ぎながらも、それでも無理せずにアンジェレッタは静かにネズミの穴の前まで歩み寄りました。

お手紙は、昨日のままに残されています。あの小人は、文字が読めなかったんでしょうか。もしかすると、お話をする事も出来ないのかも知れません…

でも、それでもお友達にはなりたいんです。アンジェレッタはしなやかな、やせた指先でその紙を拾い上げました。すると、驚いた事に何かが力強い線で書き加えられているんです。

「おいしいパンを、ありがとう。僕の名前は、ラッセンです」

もう、どうしようもなく嬉しくて……アンジェレッタは、紙を両手で強く胸元に押し付けてしまいました。『夢』ではなかったんです。月明かりに踊りを舞っていた小人は、本当にいてくれたんです。…いいえ、それどころか、お友達にもなれそうなんです！

でも、アンジェレッタは隙間に向かって話しかけようとはしませんでした。ラッセンが眠っているかも知れないからです。それに、まだ姿を見せたくないのかも知れません。ですから、アンジェレッタは決めました。今夜、もう一度お手紙を書くんです。そして、明日の朝、会ってお話をしてくれるように頼んでみるつもりです。

『夢』でない事がはつきりした今、いつもはおとなしくて物静かなアンジェレッタも、ときどきしてじつと外なんて見ていられます。大好きな本を読んでも、ちつとも集中出来ないんです。早く、夜になつてもらいたいんですが…こればかりは、どうしようもありません。

すっかり、アンジェレッタは熱がある事なんて忘れてしまっていました。

小人のラッセンのために、今日はチーズを一切れ引き出しに隠し

ておきます。お手紙も、もう何度も書き直してしまいました。
明日の朝、本当にラッセンは会いに来てくれるでしょうか……

ようやく訪れた夕暮れの中で、アンジェレッタはお手紙とチーズの欠けらを穴の傍に置きました。そして、ベッドまで静かに戻ると期待と不安の入り交じった幼い胸で、掛け布団の中に潜り込んでしまいました。

オルゴールは、今夜も音色を奏でる事無く、静かにたたずんでいました……

……

今夜は、悲しみからではなく、興味と期待からラッセンは二階へと向かっていました。

アンジェレッタは、あの返事を読んでくれたでしょうか。今日の昼間は、何だかその反応を見るのが恐くて、ずっと外に出ていたんです。でも、ずっとずっと、ラッセンはあの返事が気になっていました。

アンジェレッタの部屋にもう少しの所で、不意に素晴らしい香りが漂ってきました。この香りは……チーズです！ラッセンは、もう用心なんて忘れて、最後のいくつかの段を駆け上ってしまいました。

薄く流れる闇の中に、運びやすい大きさのチーズが見えています。その傍には、今度も可愛い花柄をした紙が添えられていたんです。ラッセンは、昨日と同じようにまずそのお手紙を読み始めました。

「ラッセン、お名前を覚えてくれてありがとう。本当に嬉しくて、なんて書けばいいのかよく分かりません。お願いです、ラッセン。明日の朝、会いに来てくれませんか？誰もいなくなれば、合図にオルゴールを鳴らします。もしよければ、お友達になってもいいんです。わがままなお願いだって分かっています。でも、お願い

です、ラッセン。

待っています」

ラッセンは、何度も何度もそのお手紙を読みました。綺麗で素直な字と、そこに流れる大きな想い…優しさと寂しさが、どちらもよく伝わってくるんです。

……でも、今夜は返事も書かずに、ラッセンはチーズだけを持って部屋に戻ってしまいました。

誰もいなくなった床の上を、月の光は銀色に照らし出していきます。もう、ラッセンはその光の中で踊る必要は無さそうでした。

.....

とてもがっかりした事に、お手紙に返事は書かれていませんでした。でも、チーズは無くなっているんです。アンジェレッタは、黙ってそのお手紙を引き出しにしまうと、朝食のパンもまた一切れ隠しました。

ラッセンは、お手紙を読んでくれないのかも知れませんか。いえ、昨日はラッセンが来ずに、ネズミにチーズを持って行かれたかも知れないんです。

それでも、アンジェレッタは合図を試みるつもりでした。今日が駄目でも、明日も明後日もあるんです。これから毎晩、同じ手紙を置いておけば…いつかは……

今日は、スイールの隣町から来たお医者さまに検診してもらったんです。いつもと同じように、お医者さまは優しく声をかけてくれました。そして、同じ薬を調合してくれました。

ようやく、そのお医者さまの馬車の音も、石畳から消えてしまいました。これで、もう昼食の準備までは誰も部屋に入ってこないはず。いよいよ、合図をする時が来たんです。

こんなに、ときどきする事が病気になってからあったのでしょうか。もう、六年間も同じ事を続けてきた生活に、『何か』が加わりうと

しているんです。

太陽の下で遊ぶ事のない腕は、少し震えながら台の上のオルゴール人形を引き寄せました。大きく、深く息を吸い込んで……アンジエレッタは、そっと、人形の足下にあるネジを巻き始めました。

銀色の踊り子が、初めて陽光の下でゆっくりと回転していきます。その動きに合わせて、オルゴールからはとても悲しく静かな音色が流れ出してきました。

何かを諦めさせるような……そんな、物悲しい音楽です。でも、今日は違うんです。それは、何かの予感を秘めているようでした。

ふと、この微かな音色が本棚の隙間の穴の奥まで聞こえるのか、不安になってしまいます。でも、アンジエレッタには、古いネズミの穴まで近づく勇氣も無かったんです。

アンジエレッタはベッドに腰掛けたまま、黙ってじっと待ち続けました。

(……！)

今、何かが隙間から飛び出した気がします。でも、ずっと待っていたんですが、何も姿を見せてはくれません。違ったのでしょうか。もうすぐ、オルゴールも止まってしまいます。澄み切った音楽が部屋の中を満たす後ろから、小鳥達の歌声が聞こえてくるんです。

……やっぱり、ラッセンはあのお手紙を読んでくれなかったんでしょう……

アンジエレッタは、とてもがっかりしていました。……いいえ、とっても悲しかったんです。本当に、その青い瞳にはうつすらと涙が溢れてきました。

青白い頬を、一粒の美しい滴が伝い落ちていきます……

「泣かないで！ アンジエレッタ……」

急に、アンジエレッタの耳に小さな男の子の声が飛び込んできます。驚いて床の上を見ると、そこにはあの黒髪をした小人の男の子が立っていました。大きな黒い瞳が、自分を見上げているんです！
「ラッセン……！」

嬉しくて、嬉しくて…少しの間、何も話す事が出来ません。いいえ、ラッセンにしても、今までに無い経験で何を言えいいのか戸惑っているんです。

でも、幾度か唇を湿らせた後で、やっとラッセンは彼女に笑いかけました。

「あの…アンジェレッタ。あんなに素敵なお贈り物をありがとう」

「うん…ラッセン。わたしの方こそ、とても素敵なお踊りを見せてもらったんだもの。逢いに来てくれてありがとう…本当に、ありがとう…」

この新しいお友達に、もっともつと色々な事を話したいんですが…困った事に、何も声には出来ないんです。ついさっきまでは、言いたい事が次から次へと浮かんできていたのに…不思議な事です。アンジェレッタはオルゴールを台に戻すと、白い寝間着のままですつとベッドから降り、小人の前にひざまずきました。

「…ラッセン。わたし、初めて見た時からお友達になりたかったの…今日は、お話をしてもいいのね…？」

「うん、いいよ。じゃあ…その台の上まで運んでくれないかな。その方が話しやすいからね」

「触っても…いいの？」

気遣うような表情をしています。でも、そんな優しいアンジェレッタに、ラッセンは大きく頷きました。

本当は、やっぱりラッセンでも、あんな高い所まで運ばれるなんて、恐いんです。それに、アンジェレッタが捕まえようとしたら、自分はどうしたらいいのでしょうか…

でも、ラッセンはさっきのアンジェレッタの涙を見ていました。この女の子なら、大丈夫です。きつと、素晴らしいお友達になれる。きつと…

そつと、ラッセンの体をアンジェレッタの柔らかな指が包み込みます。小人の男の子の体を、アンジェレッタは本当にゆっくりと台の上まで運びました。そして、自分も再びベッドに腰掛けます。こ

うすれば、二人は楽に話をする事が出来るでしょう。

アンジェレッタが指を開くと、中から驚いた顔でラッセンが見上げていました。

「アンジェレッタの手…とても、熱いんだね」

その言葉に、アンジェレッタは少し寂しそうに頷きました。

「ええ…わたし、いつも熱があるの。だから、部屋を歩けるのも気分がいい時だけで、もう、何年も部屋の外に出ていないわ…」

「そうだったんだ…」

ラッセンには考えられない事です。ずっと、ずっと部屋の中にしかいられないなんて……

「ラッセン…」

黙ってしまった小人に、アンジェレッタはどうしても聞きたいと思っていた事を口にしようと思いました。

「何？」

少し、もじもじしてしまいます。話す事は簡単に思えるのですが…もしかすると、傷付けてしまうかも知れないんです。

でも、ラッセンの事を大事に思うからこそ、アンジェレッタは小さな声で尋ねていました。

「あの…もしよかったら、教えてもらいたいの……わたしが月の夜に見た時…ラッセン、とても寂しそうだったの…」

…ええ…勿論、そうだったでしょう……

それ以上は、さすがに声に出来ません。でも、心配している『言葉』は音も無く伝わってきます。そんなアンジェレッタに、ラッセンは静かに微笑んで言いました。

「ありがとう、アンジェレッタ。アンジェレッタって、優しいんだね…」

僕はね、少し前まで森の中の古い切り株に住んでいたんだ。…エルサ姉さんと一緒に…ね……」

「…お姉さまがいるの？」

問いかけるアンジェレッタに、ラッセンは力無く首を左右に振り

ました…

「……いたんだよ……」

「え？」

心から、心配そうにアンジェレッタが顔を曇らせています。ラッセンは、そんな人間の女の子に、にこりと悲しい笑みを向けました。

「…ネコにやられたんだ……僕の目の前で…悲鳴がして……」

「そんな……！」

みるみるうちに、アンジェレッタの青い瞳には涙が溢れてきます。美しく澄んだ滴は、やつれた頬に幾つもの筋を描き出し、次々と流れ落ちていきます。

「…僕は、独りになったんだ。だから、引越して…どうしても置いていけなかった髪飾りだけを持ち出したんだ……でも、やっぱり、エルサ姉さんの事は忘れられなくて…思い出してしまっんだ、あの時の事を……だから、そんな悲しみをどこかに捨てようとして…アンジェレッタの部屋を借りてたんだよ……」

ラッセンは、とても静かな口調で話しています。それが、いつそうアンジェレッタの小さな胸を悲しませるんです。アンジェレッタは、強く握り締めた両の拳を胸に押し付けて、何も言えずに、ただ辛くて涙を流し続けていました。

ラッセンも、それ以上はもう語れません。でも、自分のために、姉さんのために泣いてくれる人間を見上げると、やがて、そっと口を開きました。

「…ありがとう、アンジェレッタ……」

少女は、ただ、頭を振り続けるだけでした……

しゃくりあげる声も、少しずつ小さくなっていきます。ラッセンは、この心優しい女の子に対して、明るい笑顔を見せようと頑張りました。

「だから、あの贈り物はとっても嬉しかったんだよ。一人で食料を手に入れるのは難しいし、危険でもあるからね」

アンジェレッタにも、ラッセンが自分を気遣ってくれている事がよく分かるんです。ですから、彼女も一生懸命微笑もうとしました。「…そんなに喜んでもらえるなんて…ありがとう、ラッセン。ちょっと、待ってね…」

まだ涙に濡れている顔で、アンジェレッタはラッセンの足下にある引き出しを開けました。

「はい…これで、足りるかしら…」

取り出される一切れのパンに、ラッセンは思わず飛び上がっています。

「僕にくれるの？」

「ええ」

「ありがとう！ 充分だよ、アンジェレッタ。今までの贈り物だけで、もう何日も食料を集めに行かなくて済むからね」

小人のラッセンからしてみれば、とても大きな欠けらなんです。そのパンの塊を抱え込んだラッセンを見ながら、少しだけ、アンジェレッタは羨ましそうな目をしていました。

もう、アンジェレッタには二度と外を歩く事など出来ないんです

…多分、神様が迎え入れて下さるまで…二度と……

「アンジェレッタ……」

真剣な声がします。浮かれていた顔を引き締めるラッセンに、アンジェレッタはぼつりと呟きました。

「…わたしには、もう、外がどんな世界か分からなくなっているの…わたしが歩けるのは、あそこに並んでいる本の中だけだもの…」
「アンジェレッタ…」

真面目な顔で、ラッセンは少女を見上げると言いました。

「じゃあ、僕がアンジェレッタの目や耳になるよ。アンジェレッタの代わりに、外の世界の事をたくさん見て、話してあげる。…僕には、そんな事くらいしか出来そうにないんだけど…」

「ラッセン……！ じゃあ…毎日、逢いに来てくれるの…？」

「アンジェレッタが構わないならね」

勿論、構いませんとも！ アンジェレッタは、嬉しくてまた少し泣いてしまいました。ラッセンは、これからずっと会いに来てくれるんです。一緒にお話をしてくれるんです。

「ありがとう、ラッセン……わたし達、お友達よね……？」

「そうだよ、アンジェレッタ。よろしくね！」

につこりと笑いかけてくれます。アンジェレッタも、そんなラッセンにとっても素晴らしい、天使のような笑顔を見せていました。

窓の外では、いつもと変わらない暮らしが流れています。でも、アンジェレッタにとってもラッセンにとっても、今、『何か』が変わったんです。二人がいるこの部屋の中では、今や新しい『時間』が始まっていました。

『天使の住む家』 おわり

2・交差

藍色をした東の空が、次第に白く柔らかく溶けていきます。やがて、そこは金紅色に燃え上がり……不意に、最初の光の矢が地平から放たれました。

矢は、まずスイルの町で一番大きくて目につく教会の塔に輝きを与えます。そして、後からどんどん続いてくる光の波によって、教会が金色に染め上げられる頃、町の北にある崖と公園墓地が朝を迎えていました。

毎朝、太陽は次々に立ち並ぶ家を美しく輝かせてくれるんです。どの家にも、そこに住む人々がどんな生き方や暮らしをしていても、全てに等しく、太陽は光を投げかけていきます。勿論、アンジェレッタの家にも……

「……う、……ん……」

ロートウ川が澄み渡った青空を映し出した時、アンジェレッタはベッドの上で少し身を動かしていました。

「おはよう、アンジェレッタ」

温かな言葉が聞こえてきます。アンジェレッタは、その声にうつすらと目を開けると、話しかけてくれた小人の男の子にっこりと微笑みました。

「おはよう、ラッセン」

床の上でカーテン越しの朝の光を浴びていたラッセンは、上半身を起こしたアンジェレッタに笑い返してくれます。

あれから、毎日ラッセンはアンジェレッタに逢いに来ていました。もう、すっかり二人とも悲しみの影を追い払っています。アンジェレッタのお母さんが、最近のアンジェレッタの楽しそうな様子に驚いているほどの変わりようなんです。

「気分は良さそうんだけど……無理をしてないかしら……」

一度だけ、お母さんがそう呟いた事があります。なにしろ、アン

ジエレッタは恐らく治らないだろう病気なんですから……

…でも、ラッセンもアンジエレッタも、もうすっかり、その事を忘れてしまっていました……

「アンジエレッタ。十二歳の誕生日、おめでとう！」

ラッセンは、誰よりも一番にそう言っただけようと、ずっと前から決めていました。ですから、こうしてアンジエレッタの目覚めを待っていたんです。そんなラッセンの言葉に、アンジエレッタは幸せそうに頬を染めてしまいました。

「ありがとう、ラッセン」

お気に入りの黄色い肩掛けをして、アンジエレッタはベッドから起き上がりました。雪のように白くて細い素足が、とても頼りなく感じます。無理をせず、ゆっくりとした足取りでラッセンの傍に近付くと、アンジエレッタは彼を優しくそっと手で包み込んでしまいました。

こんな特別な朝に、一番に出逢えたのがラッセンでよかった…アンジエレッタは、本当に嬉しかったです。どうにかして、そんな気持ちを伝えたいんですが…困った事に、嬉しい気持ちがいっぱいすぎて、何も声になろうとしないんです。

「…アンジエレッタ」

小さな手が、そっと指を握り締めてくれます。アンジエレッタは、そんなラッセンに可愛らしい笑顔で応え、そのまま彼を抱き上げました。

きつと…ええ、きつと、こんな時は何も言わなくてもいいんです。きつと……

アンジエレッタは、そのまま窓辺まで小人の男の子を運んであげました。そして、朝の透明な光をいっぱいに浴びているカーテンを引きました。

窓ガラスを通して、夏の白い陽光が流れ込んできます。その波はアンジエレッタの白い手足を輝かせ、まるで彼女の体から光が射しているように見えるんです。ラッセンは、思わずこの人間のお友達

をびっくりした顔で見上げてしまいました。

アンジェレッタは、そんなラッセンにも気付かず、窓を大きく開け放しています。その瞬間、爽やかな風が彼女の豊かな黒髪をなびかせ、白い寝間着の上で踊りました。

「あっ……」

その時、アンジェレッタの家の扉が開いて、向かいのチエルナさんが出てきたんです。こんなに朝早くから、どうしたんでしょう？

「おはようございます、チエルナさん」

「やあ、おはよう、アンジェレッタ。もう起きてたのかい？」

「ええ……だって、今日は特別な日なんですもの」

ちらつと、窓の横に隠れているラッセンを見てしまいます。

「そうだったね。誕生日おめでとう、アンジェレッタ。今、お母さんにプレゼントを渡しといたからね。後で見えておくれ」

「チエルナさん、いつも、ありがとうございます……わたし、何もお返しする事が出来ないのに……」

辛そうに青い瞳を翳らせるアンジェレッタに、チエルナさんは大きく笑い声を上げていました。

「そんな事、気にするんじゃないよ。それにね、あたし達はいつでも贈り物をいただいてるよ。アンジェレッタがそこで毎朝笑ってくれているだけで、とても幸せな気分になれるんだからね」

「そんな……」

嬉しいんです。とっても嬉しいんです……

「この頃、とても気分が良さそうだけど、無理はしないでおくれよ？ アンジェレッタ。いつまでも、そこでそうして笑っていておくれ」

そう言つて、チエルナさんは家に戻ってしまいました。

「……アンジェレッタは、本当にみんなに慕われてるんだね」

ラッセンも、アンジェレッタと同じくらい嬉しいんです。アンジェレッタがこんなにもみんなから愛されていて、本当に嬉しかったです。

スコットさんも、タックさんも、ヴェルンドさんも、フレッドさんも、みんな、アンジェレッタにおめでとを言ってくれます。その度に、ラッセンも自分の事のように喜んでいました。

「でもね、今日は、いつもの誕生日よりも嬉しいの……」

みんなと挨拶を交わし、フレッドさんが作ってくれた誕生日の曲に心からお礼を言った後、アンジェレッタはラッセンを振り返りました。

「だって、こうしてラッセンがいてくれるんだもの……ありがとう、ラッセン。いつも、こうして会いに来てくれて……」

「僕だって、アンジェレッタと友達になれて嬉しいんだからね。毎日、アンジェレッタといるだけで楽しくて……うまく言えないけど、もっともっと、たくさん思ってるだよ」

「ありがとう……」

……アンジェレッタは、思っていました。もう、これがここで迎える最後の誕生日かも知れない……そんな日に、ラッセンが傍にいてくれて本当に良かった、って……

「ねえ、アンジェレッタ。下ろしてくれる？」

「ええ」

床に降りると、すぐにラッセンは本棚の隙間に走り込んでしまいました。

「ラッセン？」

どうしたんでしょう。まだ、お母さんは上がってきそうにもないんです。

アンジェレッタが古いネズミの穴まで近付いてみると、その穴からラッセンが何かを押し出そうと頑張っていました。

「ちよっと、待っててね」

苦しそうな息の下でそう言いながら、ラッセンはようやく自分よりも大きな箱を入り口から出していました。少しよじれています、綺麗なリボンが結ばれているんです。

「僕には、こんな事しか出来ないんだけど…良かったら、受け取ってくれないかな」

「ラッセン…！」

まさか、ラッセンからプレゼントをもらえるなんて思ってもいなかったんです。アンジェレッタにしてみれば、ラッセンが傍にいてくれるだけで、一緒にお話をしてくれるだけで、それだけでもう充分な贈り物だったんですもの。

「ありがとう、本当に、ありがとう…」

おかしいものです。何だか、とっても泣きたいんです。嬉しいのに、涙が溢れてくるんです…

「ほら、泣かないで。せつかくの誕生日なんだからね！」

「ええ……」

アンジェレッタは、濡れた瞳でそっと微笑みました。とっても綺麗な、優しい笑顔なんです…それは、ラッセンにはお返しが過ぎると思えるほどでした。

「…開けてもいいの？」

「いいよ。似てないかも知れないけど…」

ちよつと恥ずかしそうに、ラッセンはアンジェレッタから目を逸らしました。一生懸命、頑張ったつもりです。でも、どこか自分の感じているものとは違うんです。いいえ、想っているものに近付かなかっただんです…

アンジェレッタは、その細く透き通るような指先をリボンにかけました。ラッセンが、必死になって結んでくれたのが良く分かります。ですから、そつと、大事にアンジェレッタはそのリボンを解きました。

ちよつと、ときどきしながら箱を開けます。中のものを静かに取り出した瞬間、アンジェレッタは驚いて目を大きく見開いてしまいました。

中に入っていたものは、小さなアンジェレッタだったんです。夕陽色の素晴らしい石を彫って創られた、とても細かくて、見事な像

だったんです。

「わたし…なんて言えばいいのか分からないの…こんなにも嬉しいのに…」

微かに震える声と共に、ラッセンに向けられた青い瞳は僅かに濡れています。ラッセンは、そんなアンジェレッタを真っ直ぐに見上げると、静かに微笑みました。

「ありがとう…アンジェレッタの今の姿だけで、僕にはもう充分だよ…」

「ラッセン…」

何度も何度も、アンジェレッタは小さく頷いていました。

朝の清澄な日差しは、そんなアンジェレッタを優しく包み込んで暖めてくれます。今、アンジェレッタは確かに《特別》な『時間』の中に抱かれていました。

翌日は、お医者さまの検診があつたので、誰も部屋にいなくなつてから、アンジェレッタがオルゴールを鳴らしてくれる事になっていました。でも、いくら待っても階下のラッセンにはオルゴールの音色が聞こえてこないんです。いいえ、お医者さまの馬車も、ずっと玄関先で留まつたまま走り去ろうとはしていません。

何か、嫌な予感がします。今まで、別に意識をしていなかったんですが、確かにアンジェレッタは病氣なんです。ラッセンは、それ以上待っていていられずに、立ち上がると扉を抜けて二階に向かいました。

ネズミが開けてくれた入り口に近付いた時、お医者さまの厳しい声がラッセンの耳に飛び込んできました。

「今は、これ以上出来ません。急いで薬を取ってきましょう。すぐに熱を下げないと、危険な事になります」

（何だって？）

ラッセンは驚いて本棚の影まで飛び出していました。昨日まではあんなに元気だったのに、アンジェレッタの苦しそうな呼吸がここ

まで聞こえてくるんです。微かなうわごとを耳にした瞬間、ラッセンの胸は強く締め付けられました。自分自身も息が出来なくなっただけのように、苦しくなってくるんです。胸の奥が痛いんです。

（アンジェレッタ…！）

いったい、小人の自分に何が出来るでしょう。お友達が苦しんでいるのを、黙って見ている事しか出来ないんでしょうか…

「先生、アンジェレッタだけは助けてください！　お願いします、アンジェレッタだけは…」

取り乱しているお母さんは、お医者さまの腕を必死になって掴んでいます。でも、お医者さまは落ち着いた声で言い聞かせました。「大丈夫。解熱剤を取ってくれば、熱も下がり、発作もおさまりますよ」

「お願いします…フィオラが死んで、アンジェレッタまでもいなくなったら…もう……」

お母さんは、床に座り込むと激しく泣き出してしまいました。お医者さまは、少し迷っています。アンジェレッタのためには急がなくてはならないんですが、お母さんをこのままにしておいていいものでしょうか…

でも、ラッセンはすぐに動き出していました。アンジェレッタの熱を下げる事が、今は一番大事なんです。

（頑張るんだよ、アンジェレッタ）

解熱によく効く薬草が、すぐこの近くに生えているんです。ラッセンは急いでネズミの穴を抜けると階下に戻り、別の出口から外に飛び出していました。

夏の、鋭い光が小人を激しく突き刺してきます。ラッセンは石畳の両側にある背の高い青草を選びながら、精いっぱい走り続けました。灰色の石垣の下、川を見下ろす崖に薬草はあるんです。ほら、もう、すぐそこに……

ラッセンの姿が、濃い緑色をした茂みの向こうに消えていきます。その後ろ姿を、家の影から大きく丸い二つの瞳がじっと追いかけて

いました……

……
ようやく、お医者さまは馬車に乗り込もうとしています。お母さんは玄関まで見送りにきていたんですが、すぐに苦しんでいるアンジェレッタの所へと戻ってしまいました。

「あら？」

アンジェレッタの部屋の床板に、小さな赤い点が幾つか見えるんです。まるで、血のようです。思わず身震いしたお母さんは、急いでアンジェレッタのベッドに目を向けました。

「……？」

ベッドの下に散らばっているのは何でしょうか……

近付いてみると、それは何本かの草花でした。紅紫色をした丸い可愛らしい花が、細い茎の先端で咲いています。お母さんは、その花が何であるのかよく知っていました。

慌てて、窓を開けます。お医者さまは、今にも走り出そうと御者台で鞭を手にしているんです。

「先生！ シニアスの花があるんです！」

その言葉に、お医者さまは大急ぎで馬車から飛び降りました。シニアスの花なら、解熱剤の役割を充分に果たしてくれるはずです！ お医者さまが薬草を調合している間にも、床の上の鮮やかな点は部屋へと入り込む熱気に乾いてしまいます。どうしてシニアスの花が床に落ちていたのかなど、もう誰も知るうとはしませんでした……

アンジェレッタは、次の日の夕方まで眠り続けました。もう、熱も下がっています。目を覚ました後で、夕食もほんの少しですが食べる事が出来ました。

その時、初めてアンジェレッタは床に散らばっていた花と、赤い血のような点についてお母さんから教えてもらったんです。

「血！」

アンジェレッタには、すぐに誰が花を採ってきてくれたのか分かりました。勿論、ラッセンです。でも、床に血が付いているなんて……

恐いんです。とても恐いんです。ラッセンは大丈夫なんですか……ひどい怪我をしているなら、それは自分のせいなんです……

夕食なんて、もう食べる事が出来ません。げっそりとやせてしまった顔をいつそう白くさせながら、アンジェレッタはただラッセンの事だけを考えて震え出していました。

「あら、寒いのか？ 今日、もう寝なさい」

そう言っ、お母さんは夕食を片付けて部屋を出ていきます。寒い？ いいえ、寒くなんてないんです。ただ、アンジェレッタはとても恐かったんです。とつても、とつても恐がつていたんです。

…アンジェレッタは、ラッセンのお姉さまがネコに命を奪われた事を思い出していたんです……

もしも、自分のためにラッセンがそんな事になってしまったら…アンジェレッタは、もう自分を許せないでしょう……

怯えた目は、ゆっくりと床の上を滑ります。確かに、小さく乾いた赤い点が本棚の隙間からベッドの下まで続いているんです。どんなに違っていてほしいと願っても…でもやっぱり、それは血なんです……

「ラッセン…！」

しなやかな指先をからめると、きゅつと強く胸に押し当てて、アンジェレッタは不意に泣き出してしまいました。

「ラッセン…ラッセン……」

苦しいんです…震えが止まりません…アンジェレッタの胸の奥で、何かが壊れそうなんです……

アンジェレッタは、力いっぱい、両手を胸元に押し付けながら、古いネズミの穴まで歩いていこうと足を下ろしました。

「あつ…！」

でも、衰弱しきつっている足は、アンジェレッタの体を支えてはくれませんでした。何度やってみても、ベッドから離れる事すら出来なくなっているんです。

どうしようもなくて……アンジェレッタは両手で顔を覆うと、これ以上無いくらい悲しい声で泣き続けました…

「…アンジェレッタ…泣かないで…」

突然、微かな、本当に微かな声が足下から聞こえてきました。アンジェレッタは驚いて顔を上げると、濡れた瞳で急いでベッドの下を覗き込みました。

「ラッセン！」

小人の少年は、血と埃でひどく汚れたまま、必死になって床の上まで出ようとしてました。でも、すぐに力尽きて倒れてしまします。アンジェレッタは悲鳴を上げると、すぐにラッセンを台の上まで運び上げました。

「ラッセン…ラッセン…」

涙が止まりません。ぼろぼろの服を着て、ずっとこんなひどい状態でラッセンはベッドの下に隠れていたんです。それも、自分のような人間のために……

白く美しい滴で、やつれた頬を濡らし続ける優しい少女に、ラッセンは全身の力を込めて笑ってみせました。

「ほら…大丈夫だからね。泣かなくてもいいんだよ…ちょっと、ネコとやりあっただけなんだから…」

「ラッセン……」

もしかしたら…そう、もしかしたら、死んでいたかも知れないんです……

アンジェレッタは、いつまでも、いつまでも泣いていました。もう、ラッセンも何も言いません。少年は、そんな彼女を黙って見つめるだけでした…

「あはは、くすぐりたいよ。アンジェレッタ」

「動かないで、ラッセン」

ちよつと怒つてみせると、アンジェレッタは包帯を綺麗に結んでしまいました。

ラッセンがベッドの脇の引き出しに入って、もう三日になります。でも、アンジェレッタの心からの看護のおかげで、しばらくすれば元気になることでしょう。

白い包帯でぐるぐる巻きにされたラッセンを見て、アンジェレッタは急に涙が溢れてくるのを感じていました。どうしてでしょう……今は、とっても嬉しいはずなのですが……

アンジェレッタはラッセンにそつと顔を近付けると、優しく囁いていました。

「もつ……あんな危険な事はしないでね……」

突然の言葉に驚きましたが、ラッセンはすぐににこりと笑つて彼女を見上げました。

「ううん。大好きなアンジェレッタのためだからね。もつと危険な事でもすると思うよ」

「ラッセン……」

ちよつと恐くて……でも、その言葉はとても嬉しいんです。アンジェレッタは、不意にラッセンを持ち上げていました。

「ありがとう……ラッセン、《本当》にありがとう……」

柔らかく包み込んだラッセンを、アンジェレッタは白い頬に押し当てます。ラッセンは自分の手のひらくらいある涙をよけながら、その滑らかな頬を軽く小突くと言いました。

「ほら、泣いたりしないで。今度は、どんな話を聞きたい？ 三羽のメジロの話なんて、どうかな」

その言葉にくすくすと笑い出しながら、アンジェレッタはとても素晴らしい、綺麗な笑顔をラッセンに向けました。

「ええ、そのお話を聞かせて……」

もう一度、そつと頬に押し当てると、アンジェレッタはラッセンを台の上に戻しました。

やがて、すぐに楽しそうな笑い声が部屋の窓から外に流れ出します。きつと、もうオルゴールの音色も聞こえなくなり、ただ明るい歌声だけが、この窓からいつも温かな風に運ばれていくことでしょう。

『交差』 おわり

3・神の住む家

ゆったりとした豎琴の音色が、朝の柔らかな時間に乗ってアンジェレッタを包み込んでくれます。アンジェレッタは、目を閉じてその豊かな曲に身を任せながら、見た事も無い風景を心の内に描き出していました。

北を巡る太陽の下、若葉のように澄んだ緑色をした平原が見えてきます。そこを流れる風は、優しく、そっと触れてはきらきらと輝いて通り過ぎていくんです。ずっと遠くには、雪で白く装った山々が青く霞んでアンジェレッタを見つめていました。

とても気分がいいんです。ですから、静かに、吸い込まれるように豎琴の音が消えていくと、アンジェレッタはちよつと残念そうな顔をしてしまいました。でも、すぐに感謝に満ちた美しい笑顔で、アンジェレッタは木陰に座ったフレッドさんにお礼を言いました。

「いつも、素敵な音色をありがとうございます、フレッドさん」

「いいんだよ。俺こそ、みんなの天使に毎朝曲を聞いてもらえるなんて、そんなすごい特権を与えてもらったんだからね」

「そんな…」

思わず、アンジェレッタは嬉しくて頬を上気させてしまいました。綺麗な細い髪をしているフレッドさんは、そんなアンジェレッタに片目をつむってみせると、外階段を上って二階に戻ってしまいました。

「キジバトさんも帰るんだね」

フレッドさんの足下で虫をついばんでいたキジバトさんも、青空高く飛び去ってしまったんです。窓辺で隠れていたラッセンは、不思議そうな顔でその後姿を見送っていました。

「ええ、いつもそうなの。まるで、フレッドさんの豎琴だけを、聞きに来るみたい」

そう言って、アンジェレッタはラッセンを優しく台まで運びまし

た。自分も、ベッドに腰掛けます。この前の発作から、アンジェレッタは以前ほど長く歩いたり立ったりする事が出来なくなっていました。でも、アンジェレッタはそんな事を誰にも知られないように頑張っていましたから、気付いているのはラッセンだけだったんです。

「フレッドさんの奏でる音色は素敵だからね。でも、どうしてもっと大きな町に出ないのかな？」

フレッドさんの腕前なら、スィールよりももっと大きな町でも十分に認められるはずです。不思議そうに首をかしげるラッセンに、アンジェレッタは悲しそうな色をその青い瞳に映して言いました。

「…待っているんだと思うの。ラーシャさんの事を、ずっと……」

「え？」

その辛そうな仕草に、ラッセンは真剣な顔でアンジェレッタを見上げました。

「…話してくれる？ アンジェレッタ」

アンジェレッタは小さく頷くと、淡い黄色の肩掛けをはずし、膝の上で握り締めました。その清らかな瞳も、じっとその指先から動きません…

「…三年くらい前まで…フレッドさんね、ラーシャさんと言う名前の女性と一緒に暮らしていたの…わたし、今でも覚えてる。フレッドさんよりも、もっと綺麗な金色の髪をしていて…どんな人にも優しく、とっても思いやりのある人だったのよ…」

その日ね…ラーシャさん、木の実を採りに森へ入っていったそうなの。一週間に一度、必ずそうしてきたから…みんな、何かが起こるなんて思ってもいなくて…」

「アンジェレッタ…」

雪のように白い頬に、涙が伝い落ちるのを見て、ラッセンは立ち上がって台の端まで駆け寄りました。でも、それ以上は行けないんです。どうしようもなく…言葉でしか、慰めてあげられなくて…

「…ラーシャさん、森に入っただけ…とうとう、戻らなかったの……」

みんな、必死になつて探したのに……わたし、何も出来なくて……ただ、ここですつとお祈りする事しか出来なくて……

……あんなに、ラーシャさんに優しくしてもらったのに……何も出来なかったのに……フレッドさん、いつもわたしの事を気にしてくれるの……」

「でも、アンジェレッタは、アンジェレッタに出来る事を一生懸命したんだよ。きっと、それは本当に一生懸命だったと思うし……フレッドさんだって、それが分かってるからアンジェレッタを大事に思ってくれてるんだよ。だから、そんなに自分を責めないで。そんな事をしたら、フレッドさんに失礼だと思うよ」

「ラッセン……」

濡れた視線の先では、ラッセンが心配そうに見上げています。アンジェレッタはそつと目を拭うと、恥ずかしそうにそんなラッセンに微笑んでいました。

「そうね……ありがとう、ラッセン」

「ううん……僕なんて、アンジェレッタに何もしてあげられなくて……せつかく、話してくれたのに……ごめん……」

すっかりしよげているラッセンを見て、アンジェレッタは驚いて首を左右に振りしました。決して、そんな事はないんです。

「そんな事、言わないで……ラッセンがいてくれるから、こうして一緒にお話をしてくれるから……わたし……」

そう……楽しく笑って生きていられるんです……

しばらく、声が続きません。でも、音の無い『言葉』は、アンジェレッタの心の中から黄金色の川となり、確かにラッセンへと流れていきました。

「だから……」

ようやく、声に出来たのはそれだけでした。でも、その一言でラッセンは温かな笑顔を取り戻し、アンジェレッタに言ってくれました。

「ありがとう、アンジェレッタ。じゃあ、アンジェレッタも……ね？」

アンジェレッタは、ちょっと驚いた顔をしています。でも、すぐに真っ赤に頬を染めると、はにかみながら素敵な微笑を浮かべて頷きました。

「ええ…もう、自分を責めたりしないわ…ありがとう、ラッセン…」
何度も、何度も「ありがとう」って言ってる気がします。でも、アンジェレッタにはそれ以上の言葉が思い付かないんです。その事が、とてもじれったいんです…

でも、目の前で、ラッセンはこんな気持ちも分かっているかのようには笑っていてくれます。そして、それはきつと…《本当》に分かってくれているんです。

アンジェレッタにとって、それはとても嬉しい《真実》でした……

翌日も、フレッドさんは素晴らしい豎琴の音色をアンジェレッタに披露してくれました。

…でも、少しだけ、おかしいんです。音の波が、微妙に揺れている気がします。

アンジェレッタがじっと見ていると、フレッドさんは時々ロートウ川のある方向に目を向けています。その先には、ラーシャさんの入っていった森があるんです……

（まさか、フレッドさん…）

今までにも、何度かその仕草を見かけた事があります。でも、音楽が変化するほど、フレッドさんの心に深く、その思いが取り付いた事は無かったんです。

アンジェレッタは、心配と不安で口を開きかけました。でも、すぐに止めてしまいます。今はまだ、フレッドさん自身も自分の願いに気付いていないかも知れないんです。もしも、アンジェレッタの一言で決意してしまったら…

どうすればいいんでしょう…どうすれば、フレッドさんを森に行かせずに済むのでしょうか…

……結局、アンジェレッタは何も言えずに、家に入るフレッドさ

んを見送っていました。

ラッセンは、そんなアンジェレッタの想いにすぐに気付きました。でも、別にもつと気になる事があつたんです。

今日も、また、あのキジバトさんが来ていたんです。ラーシャさんのいなくなつた森は、以前、ラッセンが住んでいた森の事です。あのキジバトさんなら、何かを知っているのかも知れませんが、だから、フレッドさんの豎琴を聞きに来ているのかも知れないんです。すぐに、ラッセンはアンジェレッタに床に下ろしてもらつと、急いで走り出しました。アンジェレッタの驚いた声がしましたが、ラッセンは一度だけ安心させるように振り返つて笑顔を見せた後、本棚の隙間に駆け込んでしまします。

アンジェレッタの家を飛び出した時、キジバトさんは今にも舞い上がるうとしてるところでした。

「待つて、キジバトさん！」

「どうしたの？ ラッセン」

大きく息を切らしている小人の姿に、キジバトさんは再び羽を閉じると首をかしげました。

「うん…ちよつと、聞きたい事があつたんだ」

近くの茂みに身を潜めると、ラッセンはネコや人間に聞こえないように、小さな声で言いました。

「ねえ、キジバトさん…いつも、フレッドさんの豎琴を聞きに来るよね？」

「ええ、とても素晴らしい音色ですもの。どこか、懐かしい気もするし…」

「懐かしい？」

「そうなの。過去の事なんて、すぐに忘れてしまう私が言う言葉ではないかも知れないけど…懐かしいのよ」

そう言つと、キジバトさんは静かに、小さく啼きました。何だか、その啼き方が悲しそうで…ラッセンは、少し黙り込んでしまいまし

た。

「…ねえ、キジバトさん…」

しばらくしてから、遠慮するようにラッセンは小さく尋ねていました。

「森の中で、ラーシャさんって言う名前の女性に会った事はない？」

あのフレッドさんと一緒に暮らしていた人なんだけど…」

でも、キジバトさんが答える前に、ラッセンはふと思い付いたように付け加えていました。

「もしかすると、キジバトさんがラーシャさんだったのかも知れないね…」

キジバトさんは、少しの間、黙って考えているようでした。ラッセンは思わず知っているのかと期待しましたが、残念な事に次にはキジバトさんは小さく首を振っていました。

「聞いた事は無いわ。それに、私が人間だったとも思えないし…過去なんて、覚えていないもの。でもね…私は、あの人の竖琴が『好き』なの…だから、もしかすると、そうだったのかも知れないわね…」

最後は囁くようにそう言うと、キジバトさんは翼を広げて空に舞い上がってしまいます。

「じゃあね、ラッセン」

「ありがとう！」

ラッセンの言葉に、キジバトさんは一度大きく旋回すると、東のロートウ川、そしてその更に向こうにある森へと帰っていきました。

アンジェレッタは、その夜、少しの間目を覚まし続けていました。ラッセンの話では、あのキジバトさんですら、ラーシャさんの事は知らなかったんです。もう、絶対に森にはいないのでしょうか…だったら、なおさらフレッドさんを森には行かせたくありません。

あんなに、森に行ってラーシャさんを探したがっているフレッドさんを見るのは初めてだったんです。どうすれば、アンジェレッタ

にそれを止めさせる事が出来るのでしょうか…

青い月の光が、窓を通して床に美しい銀の泉を創り出しています。流れ行く薄雲によって時々揺れながらも、輝き続けているその鏡を見つめながら、ふとアンジェレッタは別の思いにとらわれていました。

…本当に、森には行かせない方がいいのでしょうか…

フレッドさんは、ラーシャさんの事が本当に好きだったんです。例えば、森の中で死ぬ事になっても…ラーシャさんを探し続けて倒れる方が、フレッドさんには幸せなのかも知れないんです…

アンジェレッタは、自分の考えにびつくりして、少しだけ迷ってしまいました。……でも…でも、やっぱりフレッドさんには死んでもらいたくないんです。ラーシャさんだって、自分のためにフレッドさんが死んでしまったら…きっと、とても悲しむと思うんです。

…いいえ……自分を恨むかも知れません…

アンジェレッタは、その時、シニアスの花を採りに行つて傷付いたラッセンの姿を思い出していました。思わず、恐くなって身震いしてしまいます。ええ、きっとそうです…絶対に、ラーシャさんはフレッドさんに傷付いてもらいたくないはずです…

アンジェレッタはベッドの上で半身を起こすと、そつと青い瞳を閉じました。白くて細い指先を、幼い胸元で組み合わせます。窓から斜めに射し込んでくる銀色のカーテンを前に、アンジェレッタは静かに祈り始めました。

「神さま、お願いします。どうか、フレッドさんを森に連れて行かないで下さい。フレッドさんは、とても寂しいんだと思います。でも、森に入つて傷付いて…もしも死んでしまったら……ラーシャさんは……」

そうです…ラーシャさんは、きっと……

駄目です。涙が溢れてくるんです…でも、アンジェレッタは、きゅつと胸に両手を押し付けると、それでも小さく呟いていました。

「…きっと、生きていたくないと思います…」

アンジェレッタは、いつしかずっとラッセンの事ばかり考えていました。ラッセンがもしも自分のために死んでしまったら…アンジェレッタは、生きていたいのでしょうか……

「お願いします、神さま…フレッドさんを、助けて下さい…」

アンジェレッタは、自分の事のように真剣に祈り続けていました。涙がずっと頬を伝い落ちていても、それを拭いてもせずにひたすら祈り続けます。アンジェレッタに出来る事は、それだけなのです…

でも、それは《全て》をする事と同じくらい、苦しくて辛いものでした。

（アンジェレッタ…）

ラッセンは部屋に入ろうとして、たまたまアンジェレッタの言葉を聞いてしまいました。悲しそうに、心からフレッドさんの事を思っ
て祈っているんです。

ラッセンには、神さまがどんな人なのか分かりません。でも、アンジェレッタは、神さまは教会にいらっしやるんだと言っていました。残念ながら、アンジェレッタには教会に行く事すら出来ないんです。どれだけ、行きたいと望んでも無理なんです…

…でも、ラッセンはどうでしょう。今までに、お祈りした事が無くても、少なくとも、教会に行く事は出来るんです。神さまと言う人に、アンジェレッタが動けず、ただ部屋の中で祈り続けている事を教えてあげる事は出来るんです。

月明かりが、アンジェレッタの頬に伝う星を煌かせています。小さな呟きが続く中、星の流れも途切れる事無く溢れ出してくるんです。

ラッセンは黙って頷くと、すぐに階下へ向かって駆け下りました。（アンジェレッタ、僕が君の代わりに行つてあげるよ…）

涼しくなってきた夜の空気が、家を飛び出したラッセンを包み込みます。ラッセンはそのまま石畳の道を右に曲がると、小人にとつてはとても辛い坂道を上り始めました。

何の物音もしません。でも、こんな時が一番危険なんです。ラッセンは、慎重に身を草や石に隠しながら、足早にクリーム色をした町並みの間を通り抜けていきました。

青い月が、可愛い星達の光を抱き込みながら、空を滑っています。その銀色の光の腕は、ラッセンの小さな姿をとらえ、ずっと守るように追いかけていました。

… どれだけの時間が過ぎたのでしょうか。

人間であればすぐなのですが、ラッセンにとってはそろそろ限界が近付いていました。森から出てきた時はもつと長い距離を歩いていたんですが、今のラッセンは、必ず明日の朝までに戻らなくてはならないんです。もしも戻らなければ、アンジェレッタがどれだけ心配する事でしょう。ですから、ラッセンは周りに気を配りながらも、必死になって急いでいたんです。

ロートウ川からそそり立つ崖の上に、ようやく、たどりついたようです。草の無い石畳の広場の端に立つと、足下にある茶色い屋根の向こうに星が見えています。その広場の先に、とても大きな建物が立っていました。

ラッセンには、昼間であっても、この建物の屋根を見る事は出来ないでしょう。ましてや、今は夜です。建物は真つ暗な闇の中にとけ込んでいて、何処までも広がっているような気がします。いいえ、今から入ろうとしているこの教会は、夜の闇そのものかも知れませんが…

少しだけ、ラッセンは体を震わせました。恐いんです。神さまと言う人は、どうしてこんな家に住んでるんでしょう。

でも、その時、ラッセンは部屋の中で真剣に祈っているアンジェレッタを思い出していました。… そうです。どうしても、入らなくてはいけないんです。アンジェレッタのためなのですから…

ラッセンは大きく息を吸い込むと、その建物に近付いていきました。勿論、人間のための扉を開ける事なんて出来ません。でも、その木の扉の下の方は、すっかり傷んでぼろぼろになっています。な

んとか、入り込めるかも知れません。

いいえ。入り込むんです。ラッセンは一番柔らかそうな部分を選んで、無理に頭を押し込んでしまいました。幸い、隙間には、まだ余裕があります。そこで、一気にラッセンは教会の中へと滑り込んでしまいました。

困った事に、真っ暗で何も見えません。光と言えば、奥の方で何かが揺れているだけなんです。その光は、よく分からない白くて大きなものを照らしているようでした。

ラッセンは、木の床の上をゆっくりと歩いて行きました。どこに、神さまはいるんでしょう？

「うわっ！」

何かにぶつかりかけて、思わず声を上げてしまいます。ラッセンは、びくつとしてしばらく立ち止まっていました。さっきの声で、神さまが近付いてくるかも知れないんです。勿論、アンジェレッタがお願いするほどの人ですから、神さまはいい人なんでしょうが…でも、やっぱり、ときどきしてしまいます。

でも…何も出てきません。

ラッセンは、もう一度、歩き始めました。

近付いてみると、見えていた光がろうそくの炎だった事が分かります。赤い炎は、白くて大きな人と、その後ろにある、よくは分からないさまざまな色のものを照らしています。ラッセンはその光が届く所まで来ると、近くにあった椅子の足に隠れて白い人を見上げていました。

両手を広げて、木にぶら下がっています。頭は、力無く垂れているんです。ラッセンにも、今はこれが彫刻なんだと分かっています。でも、揺れる炎で生まれた影は、その彫刻に何か不思議なものを与えているような気がします。今にも、何かを話しかけてきそうなんです。

この彫刻が、神さまなんでしょうか。

…彫刻に、いったい何が出来ると言うのでしょうか。

でも、アンジェレッタはあんなに一生懸命祈っていました。それに、これは神さまではないのかも知れません。ラッセンには探し出せなかっただけで、もっと他の所に隠れているのかも知れないんです。

朝までに帰るつもりなら、もう他を探している時間はありません。そこで、ラッセンはこの白い彫刻の方を向いて……でも、心は他の所にいるかも知れない神さまに向かって手を組みました。

「神さま……アンジェレッタの願いを聞いてあげて下さい。アンジェレッタは、部屋から一步も出る事が出来ないのに、あなたに真剣にお願いをしています……」

どうか、アンジェレッタの部屋まで来てあげて下さい。そうすれば、どんなに一生懸命フレッドさんのためにお願いをしているか、よく分かると思います。

……アンジェレッタは、フレッドさんに森に入ってもらいたくないんです。だから、お願いしているんです。悲しんでいるんです……アンジェレッタは、とても優しい子です。いつも、他の人の事ばかり考えています。

でも……アンジェレッタが、あんなにも悲しんだらいけないんです……僕も、辛いんです……

だから、僕のお願いです。神さま、アンジェレッタのために、お願いを聞いてあげて下さい。フレッドさんを、森に連れて行かないで下さい……」

真剣に、静かに、ラッセンは話し続けました。アンジェレッタの代わりにお願いするなんて、出来るとも思っていないません。だから、ラッセンは何度も何度も、神さまに祈り続けたんです。

アンジェレッタの願いを、聞いてあげて下さい、と……
いつまでも、いつまでも……

ラッセンは、アンジェレッタに心配させないように、気付かれないうようにしたつもりでした。でも、不思議なことに、アンジェレッ

タには分かってしまったんです。

「ラッセン、どうしたの？　とても、疲れているみたい…」

「え？　あつ、その…」

ラッセンには、嘘はつけません。どうしても、顔に出してしまうんです。

「ア、アンジェレッタだつて、ほとんど眠ってないみたいだけど…」
慌ててそう言いましたが、アンジェレッタは心配そうな目をしてラッセンを両手で包み込んでしまいました。

「ラッセン…まさか、その事で…」

台の上まで運んだ後、アンジェレッタは黙ってラッセンを見つめ続けていました。青く澄んだ瞳が、じっと動かないんです。その心配と不安に彩られた視線に、ラッセンはとうとう話してしまいました。

「うん…アンジェレッタの願いを聞いてもらいたくて…その、教会まで行ってきたんだよ…」

「ラッセン…！」

夜中に、あんな所まで出掛けるなんて…

「どうして、そんな事を…」

「アンジェレッタのためだからね」

きつぱりと、真面目な顔でラッセンは言い切りました。その言葉は嬉しいんです。嬉しいんですが……

「でも…もしも、ネコに襲われたら…」

ラッセンは、また自分のために傷付いていたかも知れないんです…

「…ラッセンが傷付いたら、わたし……お願い、もう、そんな危険な事はしないで……」

涙が溢れてきます。ラッセンは、こんな自分の想いを本当に分かってくれているんでしょうか…こんなに辛い想いを…

「アンジェレッタ…」

少し怒っているようなアンジェレッタの口調に、一瞬、驚いてしまいます。でも、すぐにラッセンは静かに言いました。

「…アンジェレッタ…アンジェレッタが苦しんでいると、僕だって苦しいんだよ……だから、やっぱり…アンジェレッタのためなら、僕は何でもするよ……」

「ラッセン……」

アンジェレッタは、もう何も言えませんでした。アンジェレッタだって、ラッセンが悲しい時は、自分も悲しいんです。まさか、ラッセンもそんな風に想っていたなんて…

「ありがとう……ありがとう……」

やっぱり、ラッセンは自分の想いを《全て》知っていてくれるんです……

「アンジェレッタ。心配かけて、ごめんね。でも、無理な事はしないよ。そんな事をすれば、きっと……」

ラッセンは、少し赤くなりながら口を閉じてしまいます。アンジェレッタも、淡く頬を染めながら…途切れた言葉に付け加えていました。

「ええ…わたし、ラッセンがいてくれるから笑えるんだもの…ラッセンがいてくれるから、毎日楽しく過ごせるのよ……だから、ラッセンがいなくなったら……わたし、生きていたくなんかない…」
小さく呟きます。きっと、アンジェレッタの心はこの通りなんです。ラッセンには分かってるんです。でも…アンジェレッタが死んだりしたら、ラッセンは…

……いいえ、ラッセンはその言葉を飲み込んでしまいました。ラッセンも、アンジェレッタも、お互いにそう思っているんです。そして、それほど想っているからこそ、相手のためには危険な事もするんです。お互いに…

それは、もう言わなくてもいい事なんです…ええ、きっとそうなんです……

秋が近づく穏やかな日差しの中、二人は黙ったまま、そっと微笑みを交わしていました…

「どうぞ、家に寄っていつて下さい」

「ですが…」

その日の夕方、タックさんの声がアンジェレッタの部屋の中に飛び込んできました。でも、応える女性の声は聞いた事が無いんです。お客様でしょうか。

アンジェレッタは窓辺に近付くと、ラッセンをそこに優しく下ろして外を覗いてみました。

（あっ…！）

思わず叫びそうになったのを、必死で抑えます。アンジェレッタのそんな様子に驚いて、ラッセンも用心しながら外を見てみました。向かいの家の前で、タックさんが見た事も無い若い女性とお話しています。見事な金髪を背に流した、とても綺麗な人なんです。

「あんだ。家の前で、何を話してるんだい？」

不思議そうに扉を開けた瞬間：ラッセンが驚いたことに、チエルナさんはその人を見て悲鳴を上げていました。

「ラーシャじゃないか！」

（え？）

ラッセンは驚いてアンジェレッタを見上げました。その尋ねるような視線に、アンジェレッタも微かに頷いています。

ええ、そうなんです。フレッドさんと一緒に住んでいた、あのラーシャさんにそっくりなんです！

「いや、違うんだよ。この人はメリアさんと言って、森の向こうのキャスリアの町から歩いて来たんだ」

「初めまして…」

「…あつ、ああ、そうなのかい。ごめんよ、あんまり知り合いに似てたもんだから」

「いえ、構いません。気にしないで下さい…」

メリアさんは、しとやかに微笑んでいます。それを見ていたアンジェレッタは、少し声をつまらせながら呟いていました。

「不思議ね…ラーシャさんも、あんな風に笑いかけてくれたの…」

「アンジェレッタ……」

見上げるラッセンに、アンジェレッタは素晴らしい笑顔に向けて言いました。

「嬉しいの……きっと、神さまがラッセンの願いを聞いて下さったのよ……」

「ううん。アンジェレッタが、あんなに一生懸命、お祈りしたからだよ」

互いに笑みを交わしている下では、チエルナさんが話し続けます。

「そうかい、旅の途中で泊まる所が無いんだね？　だったら、さあさ、中に入って……」

「いや、それが……」

「冬の間、この村に留まりたいんです。ですから、タックさんに無理をお願いして……」

困ってしまったタックさんに代わって、メリアさんがそこまで言った時、教会の方の坂道から聞き慣れた足音が響いてきました。

「フレッドさんよ」

アンジェレッタには、よく分かります。ええ、この辺りの人達のことなら、アンジェレッタは誰よりも知っているんです。

豎琴を手に、少し重い足取りでフレッドさんは曲がり角から姿を現しました。その目が、メリアさんに止まった時……

高い音を立てて、大切な豎琴は石畳の道に落ちて転がってしまいました。

「フレッド。こちらはメリアさん。キャスリアの町から来られたんだよ」

急いで、タックさんが話しています。アンジェレッタもときどきして見ていましたが、しばらく動かなかったフレッドさんは、やがて豎琴を拾って何も言わずに再び歩き出していました。

豎琴を手にした腕の震えが、ラッセンにも分かります。必死になって、フレッドさんは自分の気持ちを抑えようとしているんです。

そんなフレッドさんに、メリアさんは素敵な笑顔で話しかけていました。

「初めまして、フレッドさん。 竖琴をお弾きになるんですね」

「ええ… よかったら、また今度、聞きに來て下さい」

「ありがとうございます」

それだけで、フレッドさんはメリアさんの顔を見ないまま、足早に家に戻ってしまいました。

「さあ、あんた。 それじゃあ、この先の空き家に案内してあげなよ」

「あ？ ああ、俺もそう思ってたんだよ」

タツクさんは慌ててそう言くと、チエルナさんに追い払われるようにして、メリアさんと一緒に坂の上へと歩き出しました。

二人の姿が、曲がり角の向こうへと消えてしまいます。 見送っていたアンジェレッタがその視線を戻してみると、チエルナさんが笑いながら片目をつむってくれました。

「チエルナさん…」

アンジェレッタも、これ以上無いくらい嬉しそうな微笑みで応えます。

「さあ、一人分、夕御飯を多く作らなくちゃならないね」

そう言くと、チエルナさんは豪快に笑いながら、家の中へと入ってしまいました。

夕暮れが、狭いこの道の中まで茜色に染めていきます。 淡くて透明な桃色に縁取られた雲を見上げながら、アンジェレッタは胸の中で神さまに……そして、ラッセンに何度も何度もお礼を言っていました…

.....

翌日から、フレッドさんの音色は元の通り落ち着いてきました。

でも、一つだけ変わった事があります。あのキジバトさんが来なくなってしまったんです。

更にしばらくすると、朝の観客にはアンジェッタとラッセンの他に、もう一人、メリアさんが加わりました。あの、キジバトさんの代わりになるかのように、木陰でフレッドさんの横に座っているんです。

キジバトさんが、本当にあのメリアさんになったのか…ラッセンには分かりませんでした。

『神の住む家』 おわり

4・出発

今日は、朝から雨が降り続いています。赤や黄に塗り分けられた森も、これではすぐに、たくさんの葉を散らせてしまうことでしょう。

大好きな青空も見られず、少し疲れている気がします。そんなアンジェレッタが白い寝間着を着てベッドに横たわっていると、ラッセンが床から話しかけてくれました。

「僕、もう帰るよ。ゆっくり寝たほうがいいよ、アンジェレッタ」
「ええ…ありがとう、ラッセン」

いつも、ラッセンは心配して気遣ってくれます。何だか弱々しい微笑みに見送られながら、ラッセンは本棚の隙間へと戻ってしまいました。

それから、すぐの事です。

久しぶりにエルサ姉さんの髪飾りを取り出して見ていたラッセンは、不意に襲ってきた激しい震動に驚いて立ち上がりました。
(どうしたんだろう?)

あれは、玄関が勢いよく閉められた音です。

……嫌な予感がします。胸の奥が苦しいんです。
「アンジェレッタ…！」

急いで扉を抜けると、ラッセンは二階へと向かっていました。

古いネズミの穴を抜けると、枕元の灯りが見えてきます。本棚の影に隠れながら覗いてみると、アンジェレッタが苦しそうな声を上げています。その横で、お母さんが真つ青な顔をして座っていました。

きゅっと握り締めたアンジェレッタの愛らしい手を、必死になつてお母さんも握っています。その時、息も出来ずにいるラッセンの耳へと、お母さんの呟きが聞こえてきました。

「アンジェレッタ…頑張つて、お願い…フィオラのように、私達
所から去つたりしないで…」

その言葉にはつと我にかえると、ラッセンは外に出ようとしまし
た。発作なら、あのシニアスの花が、もう一度役に立つてくれるは
ずです。

でも、その時、玄関に馬車が到着しました。偶然にも帰る途中だ
つたお医者さまを、お父さんが見付けて呼び止めたんです。二人が
走り込んでくる音を耳にすると、再びラッセンは部屋の中へと戻り
ました。

すぐに、お医者さまはアンジェレッタを診察してくれます。薬を
調合して、注射もしてくれます。

おかげで、しばらくすると、アンジェレッタの呼吸も随分と楽に
なつてきました。

「発作の間隔が短くなっています。もう、ベッドから動かしてはい
けませんよ。きちんと守っていただかなくては、私もこれ以上はお
約束出来ません」

「そんな……」

お母さんは、顔を両手で覆うと泣き出していました。本棚の影に
いたラッセンも、とても大きな悲しみに泣きそうな顔をしています。
もう、アンジェレッタは朝の挨拶さえ出来なくなるんです。フレッ
ドさんの音楽も聞く事が出来ません。それは、アンジェレッタにと
つて、どれだけ辛い事でしょう…

「…いつも、覚悟はしています…全ては御心のままなのですから…」
お父さんはお母さんを支えながら、静かにお医者さまにそう言い
ました。

黙つて、お医者さまも頷き返しています…

…みんな、もうそれ以上は何も言いませんでした……

雨の音だけが、窓の向こうから染み込んできます。でも、何処か
静かなんです。深くて重い沈黙が横たわる中、ラッセンの心は鋭い
痛みになつと締め付けられていました……

翌朝には、雨は止んでいました。でも、青空の欠けらさえ見付けられませんか。まだ、灰色の雨雲が、空一面を覆いつくしていたんです。秋の弱まった日差しでは、とてもその分厚い毛布を剥ぐことは出来そうにありませんでした。

もう、アンジェレッタは目を覚ましています。上半身を起こす元気も無いのですが、それでもラッセンが声をかけると嬉しそうに応えてくれました。

「気分はどう？ アンジェレッタ」

「ありがとう…ごめんなさい、心配をかけてしまつて…」

「いいんだよ。そんな事、気にしないで」

落ち着いた声です。残念ながら床の上からでは顔は見えませんが、もう大丈夫なのでしょう…

でも、油断は禁物です。いつ、また発作が起こるかも知れないんです。

「今日は、もう帰るよ。無理をしたらいけないからね…」

「待つて、ラッセン……」

帰ろうとしたラッセンの背中を、アンジェレッタの真剣な声が引き留めました。

「どうしたの？」

「お願い…聞いて欲しいの…」

ラッセン……わたし、もう少ししたら…神さまのところに行くかも知れないわ…」

「アンジェレッタ！」

驚いて叫ぶラッセンに、アンジェレッタは静かに続いています。

「ううん…分かるの。もうすぐ、フィオラお兄さまのところに行くんだ、つて…でもね、ラッセン……わたし、悲しくなんてないの…生まれてすぐに神さまに召されて、会ったことも無いけれど…お兄さまの住んでいらつしゃるところに行けるんだもの…」

「アンジェレッタ……」

「嬉しいの…だから、ラッセン…」

…その時がきたら、笑って欲しいの…喜んで欲しいの…ラッセンの、いつもの元気な笑顔で……………」

「出来ないよ！ 出来るはずないじゃないか！」

床の上から、震える事が聞こえてきます。アンジェレッタは流している涙を覚られないように、小さな声で呟きました。

「お願い、ラッセン……………わたしのために、笑っていてね……………」

「アンジェレッタ……………」

ラッセンは、黒い瞳から溢れてくる涙を拭おうともしませんでした。エルサ姉さんがいなくなつて、今度はアンジェレッタまでもがいなくなつてしまつたら…いつたい、ラッセンはどうやって生きていけばいいのでしょうか……………」

…いいえ、アンジェレッタがいなくなつて……………生きていたいでしょうが……………」

「お願いね……………」

そう言つた瞬間、アンジェレッタは少し咳き込んでしまいました。

「大丈夫かい？ アンジェレッタ！」

「え…ええ……………」

激しく息を吸い込みながら、アンジェレッタは抑えていたものを吐き出すように、泣きながら言葉を押し出していました。

「本当は、一度でいいから…お兄さまのお墓に行きたかつたの…お兄さまのところに行ける事を、お話したかつたのに……………」

物心ついてからは、アンジェレッタは勿論お墓など行けなかつたんです。でも、最期の望みとなりそうな今、一度だけでも報告をしに行きたかつたんです……………」

「わがままな夢だつて、分かつてるの…でも……………」

「それ以上、何も言わないで！ すぐに、誰かを呼んでくるから……………」

「ううん！ 大丈夫…大丈夫だから……………」

全身に力を込めて、アンジェレッタは耐えていました。必死になつて、頑張つていたんです。

…少しだけ、落ち着いてきます。

アンジェレッタは、床の上で心配と不安でいっぱいだろうラッセンに、そっと優しく囁いていました。

「ラッセン、本当に、いつもありがとう…いつも、ラッセンが傍にいてくれたから…わたし、楽しく笑っていられたの……」

大好き、ラッセン……」

「…僕もだよ、アンジェレッタ……」

静かな、真剣な声が届けられます。その言葉が嬉しくて、アンジェレッタは発作なんて忘れてしくしくと泣き出していました。

「ありがとう…ありがとう……」

小さな呟きだけが、いつまでもアンジェレッタの唇から紡がれていきます…

いつまでも…いつまでも……

しばらくして、アンジェレッタは全てを告げられた事で安心したのか、静かな眠りへと入っていきました。その可愛らしい寝息を確かめると、そっと、ラッセンは本棚の隙間に向かい、部屋を抜け出しました。

自分の部屋に戻ると、ラッセンは椅子に座ってずっと考え込んでいました。手には、エルサ姉さんの髪飾りが見えています。刻まれている細工を意味も無く眺めながら、やがてその唇からは微かな呟きが零れ出してきました。

「アンジェレッタの代わりには…なれないよね……」

ラッセンにも、分かるんです。もしも……もしも、です……自分がアンジェレッタのように死を覚悟したなら…やっぱり、ラッセンもエルサ姉さんの所に行きたくなるでしょう。やっと、姉さんの所に行けるよ…そう言いたいんです。

でも、アンジェレッタには、それが出来ません。アンジェレッタにとって、それがどんなに辛い事か…どうして、アンジェレッタだけ、あんな思いをしなくてはならないんでしょう…

確かに、ラッセンなら危険とは言え、行く事は出来ます。

でも……

ラッセンが伝えても、お兄さんは喜んでくれるでしょうか。見た事も無く、近くに感じた事も無い人に、アンジェレッタの想いを自分が《全て》伝えられるとは思えないんです。アンジェレッタの願いが真剣であるからこそ、ラッセンは迷っていました。

前に、ラッセンはアンジェレッタの祈りを聞いてもらいたくて、教会まで行った事があります。でも、それはアンジェレッタの祈りそのものを伝えるつもりではなかったんです。アンジェレッタが祈っている事を、ただ知ってもらいたくて……何度も頼んだんです。アンジェレッタの代わりが出来るなんて、ちつとも思いませんでしたから……

でも、今度は少し違う気がします。アンジェレッタの代わりに、アンジェレッタの想いを直接伝えなくてはならないんです。出来るはずがないんです。ラッセンは、アンジェレッタが好きです。大好きです。でも……だからこそ、出来ないんです……

薄暗くなっている部屋の中では、一本のろうそくだけが瞬く光を放っています。その揺れる炎に照らされて、一瞬、ラッセンの手の中の髪飾りが銀色に輝きました。

その時、ふと思ったんです。エルサ姉さんなら、どう受け止めるでしょうか……

ラッセンは、エルサ姉さんの柔らかな笑顔を思い出していました。きつと、エルサ姉さんなら……誰か他の人が行ってラッセンの気持ちを伝えても、真剣に聞いてくれるはずですよ。そして、伝えてもらって……例え、その内容が悲しいものであっても……喜んでくれるはずなんです。

ええ……アンジェレッタの想いの《全て》は持っていけません。ラッセンにとって、それはあまりにも重すぎるんです。でも、必死になって話せば、アンジェレッタの気持ちの僅かだけでも伝わるかも知れません。少なくとも、アンジェレッタが伝えたがっていたと

…それが出来なくて、ずっと悲しんでいたんだと…それだけはラッセンにも話す事が出来るんです。

ラッセンは決めてしまいました。今すぐ、崖の上にある公園墓地へ出かけるんです。

椅子から立ち上がると、ラッセンは手にした髪飾りを少しの間見つめていました。そして、それをポケットに仕舞い込むと、扉を抜けて家の外へと向かいます。もう、迷いなんて何処にもありません。開かれた扉からは、微かな風が吹き込んできます。それは、誰もいなくなった部屋を一巡りした後、ろうそくの炎をそっと消し去ってしまいました…

東の空には、少し明るさが戻ってきています。このまま雲が薄くなれば、夜には星が見えるかも知れません。

でも、風はとても強く、ラッセンは吹き飛ばされないように用心しながら石や草の陰を歩いていました。おまけに、昨日までの雨で動きにくいんです。すぐに、ラッセンは泥で体中が黒く汚れてしまいました。

何度も上がっているんですが、今日ほどこの坂道が辛いと思った事はありません。でも、アンジェレッタのためなんです。アンジェレッタは、もつとベッドの上で苦しんでいるはずです。

ですから、ラッセンは弱音も吐かず、真剣な顔で石畳の小道を教会に向かって上り続けていました。エルサ姉さんが、ラッセンの今の様子を見たら、きっと、とても驚いて…でも、心から喜んでくれるでしょう。

ラッセンの顔は、もうすっかり大人のそれになっていたのです……
獣に襲われないように、気を張り詰めて…でも、必死になって急いで、ようやく教会にたどり着いた頃には、もう頭上の雲も、随分と淡くなっていました。西の方を見ると、空が少しだけ明るく茜色に輝いています。もう夕方なんです。

大きく肩を上下させながら、ラッセンは大きな岩の陰に隠れると、

初めて少し休みました。公園墓地は、教会の裏手にあります。でも、そこに行くには崖の端を歩かなくてはなりません。距離は短いのですが、ラッセンにしてみれば、とても危険な所なんです。

呼吸が戻ると、すぐに立ち上がります。手足は痛みますが、ベツドの上のアンジェレッタを思い出すと、とても休んでなんかいられません。

風は少しおさまりかけています。ラッセンはすぐに教会の東側を回ると、公園墓地へと向かう細道に入りました。

ここで身を隠してくれるものは、まばらな草だけです。それも丈が低いので、獣からは守ってくれないでしょう。ラッセンは足を早めながら、一気にここを通り抜けてしまうつもりでした。

暗がりの中、遙か右下にはロートウ川が見えています。昨日の雨のためでしょうか、水は茶色く濁り、激しく渦を巻いています。そこまでは、何も掴まる所が無い垂直の壁なんです。でも、ラッセンは恐いとも思いませんでした。ただひたすらに、墓地に着いてアンジェレッタのお兄さんに報告する事だけを考えていたんです。

不意に、左手の方で草が鳴っています。一瞬、ラッセンが立ち止まってそちらを向いた時……

…凄まじい突風が、ラッセンの体を持ち上げていました……

「うわああー！」

あつと言つ間の事だったんです…本当に、あつと言つ間の事だったんです……

悲鳴は…ただ、空しく川に向かって落ちていくだけでした……

………

「アンジェレッタ、気分はどう…？」

お母さんはアンジェレッタの簡単な夕食を手に、そつと静かに部屋の扉を開けていました。

でも、返事はありません。

薄暗い空気の中で、ベッドに横になっている姿が見えています。

…眠っているのでしょうか。

お母さんが近付いてみると、顔にはとても穏やかな微笑みが浮かんでいました。とても、幸せそうなんです。見ている者までが、胸の中を温かくしてもらえるような、そんな優しい笑顔をしているんです。

お母さんは、少し涙ぐみながらアンジェレッタの額にキスをしようと身をかめました。でも、その時、何かがおかしいことに気付いたんです。顔を寄せても、呼吸が感じられなかったんです！

見れば、幼い胸も上下に動いていません…

夕食の入った器が、力無く床へと滑り落ちていきます。激しい音が鳴り響いた直後、お母さんは鋭い悲鳴を上げて部屋を飛び出していました…

.....

お父さんに呼ばれて、すぐに隣町からお医者さまが来てくれました。でも…もう、何も出来なかったんです…

お母さんが気も狂わんばかりに泣き続けています。その後ろで、お父さんは立ち上がったお医者さまに頭を下げていました。

「…全ては御心のままに…アンジェレッタは神に望まれ、召されたんです…」

黙って、お医者さまは頷きました。そして、もう一度アンジェレッタを振り返ります。

「…不思議な笑顔です…まるで、『全て』をやり終えたような…そんな、安らかさを感じます…」

しばらくして流れ出した言葉の後、部屋には痛ましい泣き声だけがいつまでも残り続けていました…

.....

「うつ…ん……」

「気が付いたかい？」

静かな声が聞こえてきます。ラッセンは、その言葉にうながされるように、そつと黒い瞳を開きました。

昇り始めた月が、銀色の腕を伸ばしています。その光の波を背にして、大きな人影がラッセンを覗き込んでいました。

「あれ…僕…」

ええ、崖から落ちたはずなんです。その証拠に、すぐ近くにある茂みの向こうからは、ロートウ川の荒々しい、かみつくような流れの音がしています。

でも、何処にも怪我はしていません。いいえ、体中の痛みや疲れも無くなっているんです。手足の泥までが綺麗に消えていました。

「思ったよりも、早く目が覚めて安心したよ」

そう言って、頭上から見下ろしている人影は楽しそうに笑いしました。ふと、その笑い声がアンジェレッタに似ている気がして、ラッセンは改めてこの人間を見上げました。

月明かりでも、黒髪と青い瞳は分かります。十五歳ほどでしょうか、とても落ち着いた雰囲気があるんです。どうしてもかは分かりませんが、ラッセンはこの若者を危険だとは思いませんでした。

「僕はフィオラ。君は？」

「え？ あつ、ラッセン…」

「ラッセンか。よろしく」

差し出された指先を両手で包んだ時、初めてラッセンは大切な事に気付いて叫んでいました。

「フィオラ？　じゃ、じゃあ、アンジェレッタのお兄さんなんですね？」

「ああ、そうだけど」

フィオラも驚いた顔をしています。そんなフィオラに、ラッセンは急いでここまで来た訳を話していました。

「アンジェレッタが、とても会いたがつてゐるんです。話をしたが、つてゐるんです。あなたの所に行けるんだ、つて……それだけを伝えたくて……ずっと、ずっとアンジェレッタはそう願ひ続けてきたんです。でも、アンジェレッタはもう部屋を出る事も出来ないから……」

僕には、とてもアンジェレッタの想いを《全て》伝える事なんて出来ません。でも、アンジェレッタが心から悲しんでいる事だけは、知ってもらいたかつたんです。

もう……これが、僕に出来る……アンジェレッタの最後の願ひになるかも知れないんです……」

泣きながら、ラッセンは話し続けています。涙は真剣な光を宿す黒い瞳から次々と溢れ出し、精悍な頬を伝い落ちていくんです。でも、ラッセンはそれを拭おうとしませんでした。ラッセンは、男の子です。でも、泣く事が全て悪い事とは限らないんです。自分の想いのままに語り続けるラッセンは、もしかすると泣いている事すら気付いていないのかも知れません……ラッセンはただ、自分の想ひに正直に振舞つていただけなんです……

涙を流しながら……でも、静かに話し続けているラッセンを、フィオラは温かく見守っていました。とても柔らかな光を映している青い瞳は、しっかりとラッセンの『言葉』を受け取っています……

「……お願いです……アンジェレッタの願ひを叶えてあげて下さい……」
「ラッセン……」

濡れた瞳は、じつとフィオラを見上げてきます。その視線に対して力強く頷くと、フィオラはポケットから一枚の紙を取り出しました。

「なら、これを君の手から、アンジェレッタに渡してくれないか。これを持っていれば、必ず会えるから、と……」

そして、僕はいつまでも待つてゐるから……そう、伝えてもらいた
いんだ」

「うん！」

勢いよく、頷いています。ラッセンはその大きな紙切れを受け取

ると、何とか小さくして髪飾りの入っているポケットと一緒に仕舞いました。

すっかりと晴れ渡った夜空から、月は四方へ銀の矢を放っています。その美しくも静かな矢を浴びながら、ラッセンはフィオラにスイルの町の入り口まで運んでもらいました。

「じゃあね、ラッセン」

「うん、じゃあね！」

きつと、フィオラはアンジェレッタの想いを分かってくれたはずです。その事を早くアンジェレッタに知らせたくて、ラッセンは大きく手を振ると、すぐにフィオラに背を向けてしまいました。

銀色の輝く腕は、フィオラの体をゆつくりと包み込んでいきます。ちぎれた雲の一片がその月明かりを弱めた時、フィオラの体は薄れていく光の中へと溶け込み、やがて見えなくなってしまうました。

.....

月の光は、アンジェレッタの部屋の中にも射し込んでいます。

今は、もう部屋には誰もいませんでした。お医者さまは帰りましたし、お父さんはお母さんを支えて下りてしまったんです。斜めに覗き込んでいる月の光は、ベッドの上のアンジェレッタだけを優しくそっと照らし出していました。

「アンジェレッタ！」

本棚の隙間から、声が飛び出してきました。その喜びに満ちる呼びかけに、アンジェレッタはうつすらと青い瞳を開けていました。

「ラッセン……」

「アンジェレッタ、アンジェレッタのお兄さんに会ってきたよ！」
「ラッセン！」

慌てて上半身を起こしてしまいます。その元気そうな姿に、ラッセンはいっそう嬉しくなって話していました。

「そうなんだ、会って話をしてきたんだよ」

「まさか、公園墓地まで…そんな危険な事を…」

「いいんだよ、それは。アンジェレッタのためなんだからね」

「でも……」

嬉しいんです。嬉しいんですけど…

「駄目だよ、アンジェレッタ。自分を責めたりしないで。アンジェレッタだって、僕のために悲しんだり苦しんだりしてくれてるんだから…」

もう、何も言わないで…約束してくれるかい？」

「…ええ、ラッセン。ありがとう……」

濡れた瞳で、にこりと微笑んでくれます。ラッセンは、そんなアンジェレッタの笑顔に優しく笑みを返していました。

「…アンジェレッタのお兄さんもね、そんな感じで笑ってくれたよ」「ラッセン…」

ちょっと、恥ずかしくなって目を伏せてしまいます。でも、アンジェレッタはふと気が付いて、ラッセンを真っ直ぐに見つめていました。

「でも…フィオラお兄さまは、もう亡くなられたのよ…？」

「え？」

そうなんです。アンジェレッタは、フィオラお兄さまのお墓に行きたかったんですから…

「じゃあ…夢だったのかな…」

でも、確かにラッセンは話をしたんです。ええ、こうしてアンジェレッタと話しているように……

ラッセンの右手が、自然とポケットの辺りをさまよい始めます。

その中に何が入っているのかを不意に思い出して、ラッセンはポケットに手を入れました。

その手は、一枚の紙切れを持って出てきます。そうです、確かにこれはフィオラからもらったものなんです…

「でも、ほら…僕は、これをアンジェレッタに渡してくれるように頼まれたんだよ。これを持っていれば、必ず会えるから、って…い

つまでも待っているから、って……」

「お兄さまが……」

本物である事を確かめるように、アンジェレッタは白い腕を伸ばしました。

月の優しい光が、その腕を銀色に輝かせてくれます。

ラッセンも、その小さな体を月明かりに照らされながら、精いっぱい両手に紙を広げて差し出しました。

細くしなやかな指先が、紙の端に触れようとしています。アンジェレッタが、その紙の存在を受け入れた瞬間……

「うわっ！」

「きゃっ……」

二人の手にしている紙が、とてつもなく眩しい銀色の光を放ったんです。

……アンジェレッタもラッセンも、思わず目を強く閉じてしまいました……

すっかり雲を追い払った空では、銀色の月が穏やかな表情でスイールの町を見下ろしています。ロートウ川を煌かせるその腕は、冷たさの増した風と共にクリーム色の町の中へと入り込み、アンジェレッタの部屋の窓から中を覗き込んでいました。

優しい微笑みを浮かべた少女が、ベッドの上で静かに横になっています。その頬を柔らかく照らしながら……崖下に横たわる少年と同じく、月の光は少女にも惜しめない銀の輝きを分け与えていました……

『出発』おわり

レフリゲリウム

そは 時間の鎖と 久遠の海

二つを結ぶ 黄金の鍵

5・虹の海

微かな、心地好い揺れが伝わってきます。

その震動に誘われるようにそつと目を開けてみると、柔らかな春の陽射しが優しく、青い瞳の中へと飛び込んできました。

右手の窓から、その暖かな光は射してきています。斜めに走る光の帯は、そのまま車内に入ると、古い木の板で出来た床の上に広がって、瞬いていました。

汽車の天井には、昼間でしたが、夕陽色をした炎のランプが揺れています。左右に振れるランプをしばらく見つめた後、少女は白くしなやかな指先で、自分が腰掛けている座席を触ってみました。少し、堅い感じがします。でも、座り心地はそれほど悪くありません。……ここは、いったい何処でしょう。この汽車は、いったい何処へ行こうとしているのでしょうか……

十二歳の少女が考え込んでいる間にも、汽車は音も無く線路の上を滑っていきました。少女が座っている窓からは、鮮やかで若々しい緑をした草原が、ずっと遠くまで広がっているのが見えています。風の清らかな腕が、その草々の頭をそつと撫でては通り過ぎていきます。その様子がとてもはつきりと見えたので、遠くの景色なのに、静かな音色が車内にまで聞こえてくるようでした。

ふと、優しい瞳が向かいの席に移ります。その時、突然、そこには一人の少年の姿が現れていました。

少年は、じつと窓の外を見つめています。吹き込む風に短い黒髪が乱れ、正直な色をした黒い瞳が、そつと細められます……

……ええ。確かに、以前にこの少年を見た事があります。でも、その時はとても小さかったので、もつと幼く感じられたんです。十歳だと聞いていたのに、何だか、今、目の前にいる少年は、随分と大人びて見えます。

じつと見つめていると、少年がその視線に気付き、振り返って微

笑みかけてきました。

「どうしたの？ アンジェレッタ」

白くて雪のようなアンジェレッタの頬が、ほんのりと赤く染まっています。胸元まで赤くなっているのが自分でも分かったので、アンジェレッタは思わずうつむいてしまいました。

胸がどきどきしています。とても大きな音で、今にもラッセンに聞こえてしまいそうなんです。アンジェレッタは、その音を少しでも抑えようと、可愛い両手を重ねて胸元に押し付けました。

ラッセンも、健康そうなアンジェレッタから照れたように目を逸らしていました。いつも見ていたアンジェレッタよりも、今、目の前にいるアンジェレッタの方が可愛く思えるんです。それは、同じ大きさになっているからかも知れません。ベッドで横にならずに、自分と同じように生き生きとしているからかも知れません。でも、ラッセンにとってはどちらでもいい事です。アンジェレッタがこうして元気にいる…それが、ラッセンにとっては一番素敵な事でした。二人とも、ずっと黙り込んでいます。でも、声にしない黄金色の言葉は、無数に二人の間を飛び交っていました。だからこそ、二人は少し恥じらいながらも…やがて、真っ直ぐに互いを見つめると、幸せそうに笑みを交わせたのです……

「ほら、見て。ラッセン」

窓の外をずっと見ていたアンジェレッタが、不意に草原の向こうを指差しました。ラッセンも見ようと、そこには七色の光が次々と生まれては流れていたんです。

うつすらと輝きを弱めた最初の光は、次に来た波に飲み込まれてしまいます。でも、その奥からは、どんどんと新しい光の帯が走り始めているんです。

「何だろう？」

「虹の海ですわ」

急に後ろから声がしたので、二人は驚いて振り返っていました。

通路の向こう側の席に、いつのまに入ってきたのか、一人の女性が座っています。透き通るような金髪を背に流しているその女性は、太陽のような深みのある金色の目で、二人ににこりと微笑んで言いました。

「あの浜辺では、虹の砂が虹色の海と溶け合っているのですよ」

何だか、何処かで耳にしたような声です。優しく包み込んでくれるような、温かくて懐かしい声なんです…

「あの…あなたは…」

ラッセンがようやく口を開くと、その女性は僅かに微笑を深めて応えてくれました。

「私が誰であるかなど、『本当』に理解出来る方はいません。ですから、私は幾つもの名前を戴いているのです。ある所では、私は二ーヴとも呼ばれています。ですが、ここではアンナと呼んで下さるのが一番似合っているでしょうね」

「アンナ、さん…あの、ここは何処なんですか？」

少し、声が小さくなってしまいます。アンジェレッタには、このアンナさんと話をする事が、とても凄い事のように感じられたんです。僅かな一言が、とても重いものになりそうなんです。

「『ここ』と呼ばれる場所は、『時間』の中でしか存在しないものです。ですから、フロプスには『ここ』と言う場所はありません。いいえ、『在る』や『無い』といった言葉も、『影』の世界での意味とは異なっているのです」

ラッセンもアンジェレッタも、アンナさんの言っている事はよく分かりませんでした。でも、その『言葉』は深く胸に刻み込まれていたんです。それは、きつと、分かった事と同じなのでしょう。何かを知る事は、『時間』に縛られた行為ではないのですから…

その時、少しずつ汽車は速度を緩め始めていました。

やがて…小さな駅に着くと、静かに止まってしまいます。

「あつ…」

白く眩しいほどに輝いた駅の柱には、『虹色海岸』と書かれた看

板が打ち付けられています。見れば、虹色に光る波が、これも虹色にさんざめく砂浜へと、すぐそこまで打ち寄せているんです。二人の耳には、優しい潮騒がはつきりと聞こえていました。

「行ってみようよ、アンジェレッタ!」

「でも、降りてしまつて大丈夫なの?」

アンジェレッタが不安そうにラッセンに尋ねているのを見て、通路の向こうにいたアンナさんは静かな笑みを零して言いました。

「大丈夫です。動く時には、その知らせがあるものです。あなたがたは、その《声》を聞けるはずですよ」

「さあ、行くよ! アンジェレッタ」

アンナさんの言葉を考える間もなく、アンジェレッタはそのしなやかな指先をラッセンに預けていました。

通路を走り、汽車の扉を抜けて温かな光の世界へと飛び出しながら、アンジェレッタは不思議な気持ちで自分を引っ張ってくれるラッセンの手を見つめていました。

今思えば、こうして手を握る事も初めてなんです。ラッセンが小さかった頃には、いつもアンジェレッタがラッセンを運んだり、導いたりしていました。でも、これからは違ふんです。アンジェレッタは、ラッセンに身を任せてもいいんです。

また、胸がときどきしてきます。とつても素直な気持ちで、アンジェレッタはこの素敵な出来事を受け入れていました。

駆けていく二人の足下では、小さな砂粒が高い音色を放ちながら、次々と輝きを強めています。それは七色の渦を作ったかと思うと、並んでいる二人の足跡をゆっくりと順番に消していきました。

「広いんだねえ」

波打ち際まで来ると足を止め、ラッセンが驚いたように呟いています。森で育ったラッセンは、海を想像の中でしか見た事が無いんです。いいえ、それはアンジェレッタにしても同じです。アンジェレッタだって、本の中の海しか知らなかったんですから。

とても静かな雰囲気です。これだけ大きいのに、少しも恐さを感じないんです。いいえ、それどころか、アンジェレッタはこの虹の海に優しさを覚えていました。手を差し伸べたら、そっと握って励ましてくれるような気がします。きつと、泣きそうになったら、慰めるように自分の体をそっと包み込んでくれるでしょう…

…ええ…ラッセンの言葉のように…

駄目です。どうしても、ときどきしてしまいます。真っ赤になっ
ている自分を知らないように、アンジェレッタはラッセンの手か
ら指を抜いて、砂浜にしゃがみこんでしまいました。

七色の線がすぐ足下まで滑ってきては、さらさらと美しい音を届
けて、また沖合いへと戻っていきます。その波に手を浸したかと思
うと、すぐにアンジェレッタは驚いて両手ですくいあげていました。

「見て、ラッセン」

「どうしたんだい？」

アンジェレッタは、両手を高く差し上げています。その中を覗き
込むと、ラッセンも驚いて叫んでしまいました。

「この海も、砂で出来てるんだ！」

ええ、そうだったんです。アンジェレッタがすくいあげたのは水
ではなく、浜辺のものよりもずっと細かな砂粒だったんです。

指の隙間から溢れ落ちていく砂が、小さな可愛い虹を作っていま
す。よく見れば、一粒一粒が七色に次々と変化しているんです。

ラッセンもその波打ち際に座り込むと、自分の手に砂を集めてい
ます。並んで腰を下ろした二人は、いつまでも飽きる事無く砂粒の
光の誕生を見つめていました。

どれだけの時間が流れたのでしょうか。

いいえ…確かに太陽は半分くらいまで昇ってしまいましたが、何
だかここには『時間』なんて無いような気がします。太陽は、きつ
と自分の思い通りに動いているだけで、『時間』なんて気にしてい
ないのでしょうか。

アンジェレッタは、雪よりも白くて細い…でも、健康そうな足で砂浜を走っています。虹色の波を追いかけたかと思うと、次には楽しそうに逃げているんです。その可愛らしい唇からは明るい笑い声が溢れ出し、澄んだ青い瞳はきらきらと輝いていました。

黒い髪を風に遊ばせて、太陽の柔らかな陽射しを浴びているアンジェレッタを見ながら、ラッセンは眩しそうに目を細めていました。ベッドに横たわっていた時のアンジェレッタも、ラッセンにはとても大事でした。でも、こうして元気に笑ってくれるアンジェレッタは、もっと大事に思えるんです。なんて素敵な微笑みなんでしょう！ ラッセンには、アンジェレッタが本当に天使になったのかと思えるほどでした。

「ラッセン…」

そっと思守ってくれる黒い瞳に気付いて、アンジェレッタはふと足を止めてしまいました。それでも、柔らかな視線は動こうとしません。不意に白い頬に赤みがさし、アンジェレッタは恥ずかしそうに目をうつむけると囁きました。

「そんなに见ないで…わたし、何処がおかしい…？」

「ううん、そんな事ないよ。とっても綺麗だよ、アンジェレッタ」
ラッセンの真剣で力強い言葉に、アンジェレッタはどうしていいか分からないほど真つ赤になってしまいました。でも、嬉しいんです。とても嬉しいんです。

「ありがとう……」

でも、それだけしかアンジェレッタには呟く事が出来ませんでした…

ラッセンだって、素敵なんです。小人だった時も大切でしたが、今はもっと、アンジェレッタにとってラッセンは大切な人でした。でも、それがどうしても言えないんです。伝えたくて…知ってもらいたくて……

でもやっぱり、アンジェレッタには、まだ何も言えませんでした。何となくアンジェレッタもラッセンも黙ってしまった時、突然、

二人は同時に『何か』を聞いたような気がしました。いいえ、耳に聞こえたものではありません。胸の奥の方から、静かで動く事も少ない心の下の方から、その《声》は届いたんです。

「さあ、戻ろうか、アンジェレッタ。汽車が出るみたいだよ」

「ええ」

ずっと右手を出してしまいます。自分がそんな仕草をしている事にアンジェレッタが気付いた時には、もうその手はしっかりとラッセンが握ってくれていました。

でも、それが自然な事のように思えます。ええ…この手は、きっとラッセンの中にある事が《本当》なんです……

虹色の浜辺を走りながら、アンジェレッタは幸せな微笑みをいつまでもその頬に浮かべ続けていました。

『虹の海』おわり

6・クスノキの原

アンジェレッタとラッセンが向かい合わせになって席に着いた瞬間、何の合図も無しに汽車が走り出しています。白い柱が並ぶ無人の駅舎は、北を巡る日輪の光に目映く照り映えながら、去っていく汽車の後ろ姿を静かに見送っていました。

右手の窓からは、遠くまで虹の海が見えています。静かで深い潮の音色が、車内へと満ちてくるんです。アンジェレッタとラッセンはその音に誘われるように、一緒に窓辺に並ぶと、打ち寄せる七色の砂をいつまでも眺めていました。

やがて、汽車は左へ……南へと緩やかに曲がろうとしています。少しずつ、虹色の波が遠ざかってしまします。半分くらいまで昇った太陽の光で眩しく輝いている海原が、低い丘の向こうへと消えていこうとしているんです。

七色の煌きが草々に完全に隠されてしまった時、アンジェレッタは少し悲しくなっていました。あんなに大きくて優しいものを、もう見る事は出来ないんです。

黙って窓から離れ、座席に腰掛けると俯いてしまします。その時、膝の上でしっかりと重ねられた小さな手に、力強い手がそっと加えられました。

「ラッセン……」

黒い瞳が、励ますように覗き込んでくれます。アンジェレッタが悲しみに染まる目を上げると、ラッセンは更に手に力を込めてくれました。

「……ありがとう……」

どうして、それだけしか言えないんでしょう。こんなにも、ラッセンは多くの『言葉』で話しかけてくれるのに……

「……アンジェレッタ。あの海は消えたりしてないんだよ。何処にでも……ここにだってあるんだ。僕には……アンジェレッタの中に、あ

の虹の海が感じられるんだよ……」

「そんな…」

嬉しいんですが、それは違います。海があるとすれば、それはラッセンの中にあるんです。いつも、悲しい時に励ましてくれるラッセンこそ、アンジエレッタにとっては虹の海なんです。

小さく頭を左右に振るアンジエレッタに、ラッセンはにこりと笑っていました。その目は、どれだけ否定しても、ラッセンがアンジエレッタをあの海だと思っている事を物語っています。

アンジエレッタが、このもらいすぎの贈り物に口を開こうとした時、通路の向こう側から温かな声が聞こえてきました。

「虹の海は、あなたがた二人の中にあるですよ」

「アンナさん…」

二人の視線の先で、アンナさんは穏やかに微笑んでいます。

「それでいながら、海は『一つ』しかありません。アンジエレッタの中の海も、ラッセンの中の海も、『同じもの』なのです。それが《本当》なのだ、分かっているのでしょうか？ それを信じていればいいのです。《真実》は認められ、信じられるに値するものなのですから」

「……はい」

二人は頷くと、互いに向き合いました。青と黒の瞳が相手を見つめています。

次には、二人の頬には素晴らしい微笑が零れていました。

海岸を離れ、汽車は青草の繁る草原を走っています。地平線が見える辺りまで、何処までも草の原は広がっているんです。白く霞む空の裾野まで満ち溢れている緑に、思わずアンジエレッタはみとれてしまいました。

緑といっても、一つの色ではないんです。

「見て、ラッセン。綺麗な若草色…」

「本当だね。ほら、今見えてきた辺りは萌葱色だよ」

「その横は、金色に輝いているのね」

黄緑や黄、白や深緑に浅緑…と、たくさんの色を見付けていきます。そんな楽しい会話を選んでいく風によっても、草の色はほとんど変わっていくんです。

ずっと遠くまで広がっているのは、確かに同じ背丈くらいの草ばかりです。でも、よく探してみれば、小さな草だつてあるんです。同じように見える草でも、その一つ一つが違った色を持っています。そして、だからこそ、これだけ集まればとても素晴らしい草原になるでしょう。

銀色の優しい風は、そんな青草の頭に少し触れながら、何処までも進み続けています。頭を撫でられた草が、陽光に煌いてそんな風を笑って見送っています。アンジェレッタには、その可愛くて愉しそうな声までが聞こえてくるようでした。

ベッドで横になつていた部屋の外には、こんな素敵な風景があつたんです。アンジェレッタには、これらは全部、本の中の想像の出来事でした。

でも、今は違います。こんな素晴らしい景色を見ているだけでなく、実際に入っていく事も出来るんです。

ラッセンと一緒に……

アンジェレッタは思っています。景色はとても美しいものです。でも、ラッセンが隣りにいるからこそ、同じように傍で笑ってくれているからこそ、この風景は素敵なものになつていくんです。ええ、きっとそうです。ラッセンがいなければ、この美しい風景も、ただの『絵』でしかなかったでしょう……

ラッセンとは、つい数ヶ月前に逢つたばかりのはずです…不思議なんです。どうやって、それまで自分は喜びを感じていたのでしょうか…？ アンジェレッタには、どうしても分かりませんでした。だいたいにして、ラッセンのいない『時間』そのものが信じられないんです。ラッセンはいつでも傍にいてくれます。それが《本当》なんです。きっと、ラッセンと逢うまでの時間は間違いだつたんで

しょう。

そのラッセンは、アンジェレッタの横で窓の外を見つめています。アンジェレッタはそんなラッセンを見上げると、ずっと、いつまでも目を逸らそうとはしませんでした。

風にそよぐ緑の上には、何処までも澄み渡った青空が広がっています。とても深く、どんどんと吸い込まれてしまいそうなくらいに綺麗なんです。そんな青い天井に、薄い雲が、まるで刷毛ではいたように一筋だけ描かれていました。

ラッセンがそんな青空から視線を下に戻した途端、急に目の前がぱあーっと黄一色に染め上げられました。

「うわっ！」

「まあ……」

アンジェレッタも青い瞳を大きくすると、じつと新しい風景を眺めています。

草原が、一瞬にして菜の花に覆われたんです。鮮やかに燃え上がるような黄色い花が、地平線の向こうまで、本当に、余す所無く満ち溢れているんです。二人の目の前で、太陽に照り輝く金色の花は、緩やかにうねりながら何処までも続いていました。

「綺麗だね……」

ラッセンには、それだけしか呟けません。いいえ、アンジェレッタなんて、何かを口にする事も出来なかったんです。

喜びを満面にたたえているアンジェレッタの横顔を見付けると、ラッセンは優しく微笑みながら、そこから目を放そうとはしませんでした。この幸せな表情を、もう二度と曇らせてはいけません。病気なんて、二度とさせるもんですか。アンジェレッタは、いつまでもこうして喜びと楽しさに抱かれているべきなんです。

純真な黒の瞳が、強い決意に染まります。ラッセンは、もうしばらく優しいアンジェレッタの横顔を見つめた後、視線を窓の外に向けました。

見れば、前方から大きなクスノキが近付いてきています。なんて大きいんでしょう！一面の菜の花から顔を覗かせている、短い草の生えた丘の上で、そのクスノキは堂々と太陽に向かって両手を広げて立っていました。

濃い緑色の葉と、黒い葉影が見事な模様を描いています。その絵柄の中に、時々、風のいたずらで陽光に煌く銀の閃光が加わるんです。それらクスノキが纏う素晴らしい絵は、考えられないくらいに太い幹によって、しっかりと支えられていました。

何ものにも負けない、力強い雰囲気がいりやりに放たれています。でも、何処か優しさも感じるんです。風にゆっくりとしなる枝先のためでしょうか、それともそこから流れ出している涼しげな音色のためでしょうか。

「……静かね……」

アンジェレッタは、そう囁いています。風は、心地よい音楽を運んでくれているんです。それは、確かに聞こえています。でも、だからこそ……でしょうか。とても奥深いところで、沈黙がこの風景を包み込んでいる気がします。それは恐怖や悲しみを感じさせるものではなく、二人に安らぎと穏やかさを与えてくれるものでした。

あのクスノキの下まで、どうにかして行けないものでしょうか。ラッセンは、あの木の力と優しさに触れてみたかったです。静けさに抱かれてみたかったです。

そう思った瞬間、ラッセンは汽車の天井からさらさらと音が降ってくる事に気付きました。体には、光の泡粒が幾つも描き出されています。

「え……？」

思わず見上げた先では、緑濃い無数の葉が重なり合っていました。風に揺れるたびに、その緑色の光は濃くなったり薄くなったりしています。そして、その枝葉の隙間から零れた光が、ラッセンの体に丸い泡を作り出していたんです。

腰を下ろしている丘は、短く丈の揃った草に包まれクスノキを囲

んでいます。丘の周りには、汽車の窓から見えていた可愛らしい菜の花が、ずっと遠くまで見えていました。その菜の花にそっと触れてきた風は、ラッセンの頭上で葉擦れの音を奏でては過ぎていきます。落ちてくる澄んだ音色の、涼やかで綺麗な事といったら！ アンジェレッタの笑い声くらい、素敵なんです。

丘に座って、笑いながら葉影に抱かれていたラッセンは、その時ふと、アンジェレッタがいない事に気付きました。とても驚くと同じ時に、悲しみと恐ろしさが胸の中に湧き上がってきます。さっきまでの楽しい気持ちなんて、もう何処かに消え去っていました。

アンジェレッタがいなければ、この素晴らしい風景も意味を持たなくなるんです。今、ラッセンは独りででした。これから、ずっとそうなんでしょうか……

いいえ。アンジェレッタがいなくなるなんて、そんな事はありません。そんな世界は、《嘘》でしかないんです。アンジェレッタと一緒にいるからこそ、頭上の青空は澄み切っているんです。アンジェレッタと見ているからこそ、菜の花は鮮やかな愛らしい黄色に染まっているんです。アンジェレッタといるのでなければ、このクスノキも力と優しさを失ってしまい、沈黙は重く苦しいものになってしまうでしょう。

ラッセンは、大急ぎでアンジェレッタを探そうと立ち上がりました。その時、腕に細くしなやかな指先が絡まってきたんです。その温かな感覚に想いを寄せた瞬間、ラッセンは汽車の中に座っている自分を見付けていました。

「ラッセン……よかった……」

目の前で、アンジェレッタが微かに濡れた目をしています。

「アンジェレッタ……？」

茫然としているラッセンに、アンジェレッタは心を落ち着けると何とか笑う事が出来ました。

「ごめんなさい……ラッセンが急にいなくなったような気がしたから、わたし……何でもないの、ごめんなさい……」

でも、白い指先は、いつそうしつかりとラッセンの腕に掴まってきます。ラッセンは、そのいじらしい指先を自分の手で包み込むと、そっと微笑んでいました。

「ありがとう…アンジェレッタ。……いつまでも、一緒だよ」

「ラッセン……」

ええ、そうですとも。これからは、ずっと一緒にいるんです。いつまでも、何処までも、アンジェレッタと一緒にいるんです……

美しい赤に頬を染め上げているアンジェレッタは、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに微笑んで頷いてくれます。その時、二人は『何か』に…《声》に導かれるように、共に窓の外を覗いていました。大きく緑の翼を広げたクスノキが、菜の花の海の真ん中で、後ろへ遠ざかっていこうとしています。そのクスノキが作る木陰には、今、一人の女性がたたずんでいました。

「アンナさん…！」

ええ、そうなんです。あの透き通るような金髪は、アンナさんに間違いありません。

アンナさんは、透明なくらいに白くて細い両腕を、静かにそっとクスノキへと伸ばしています。その調った美しい指先が、歳を経た幹まで届いた瞬間……

「あつ！」

アンジェレッタもラッセンも、思わず声を上げてしまいました。

クスノキの枝先に、幾つもの白い花が咲き始めたんです。六枚の花弁を持つ可憐な花々が、次から次へと、無限に咲いていくんです。雪を散らしたように、白く小さな光は緑を背にして眩しく輝いています。

なんて綺麗なんでしょう。

なんて優しいんでしょう。

胸の奥から、不思議な音色が湧き起こってくるようです。その心の高鳴りに合わせて、アンジェレッタの瞳からは、柔らかな真珠が溢れ落ちていました。

クスノキは、次第に小さくなっていきます。でも、二人は互いに手を握り締めたまま、いつまでもその姿を見送って目を放そうとはしませんでした。

『クスノキの原』 おわり

7・夕陽の川辺

菜の花は、現れたときと同じように急に無くなってしまいました。今、二人の目の前では、若々しい緑色をした草のじゅうたんが、青空をくつきりと切り取ってしまっています。

いったい、この草原は何処から続いているのでしょうか。そして、何処まで広がっていくのでしょうか。

(うつん…)

きつと、『場所』なんて存在していません。アンジェレッタは、アンナさんが教えてくれた言葉を思い出していました。この草原は、何処にでもあるんです。でも、何処にも無いんです。

おや？　そこで、アンジェレッタはちよつと考え込んでしまいました。何だか分からなくなってきたんです。

「どうしたんだい？　アンジェレッタ」

向かいの席から、ラッセンが首をかしげて話しかけてくれます。でも、アンジェレッタにはうまく説明することさえ出来ませんでした。

「うつん…何だか、よく分からなくて…」

何が分からないのか、これではラッセンにはもつと分かりません。目をぱちくりさせているラッセンに、アンジェレッタは困った顔をしてしまいました。

ラッセンは、いつもアンジェレッタのことをよく分かってくれています。それは、声にはしていない事でも同じでした。でも、だからといって全てを知ってくれているわけではありません。やっぱり、口にしないでならない事もあるんです。

こんな時、ちよつとラッセンを遠く感じてしまいます。アンジェレッタがどれだけ頑張っても、ラッセンは『他人』のままなんです…でも……ええ、アンジェレッタには解っていました。

『他人』だからこそ、こんなに『大好き』になれたんです。

《本当》に好きになれたんです……

…どうしたらいいんでしょう。胸元まで赤くなってしまふんです。ときどきしてしまうんです…それが嬉しいのに、何だか恥ずかしい気もするんです…

こんな気持ちも、ラッセンは分かっているんでしょうか……

うつむけた瞳をちらっと上げて、ラッセンの顔を見てしまいます。その視線に応えて、ラッセンは温かく笑ってくれています。それがまた嬉しくて、恥ずかしくて…

慌てて、アンジェレッタは窓の外に顔を出してしまいました。

ずっと以前、ラッセンが小さかった頃の自分とは、随分と変わってしまったように思えます。でも……今の方が素直な気もするんです……

アンジェレッタは、柔らかな風の中で小さく溜め息を吐いてしまいました。何だか、『自分』まで分からなくなってきたんです…

でも、どれだけ『自分』が変わっても、それは……

…ええ、そうです。ラッセンのためなんです…それだけは、アンジェレッタにもはっきりと分かっていました。

涼しげな陽光を、眩しそうにいつぱい受けていた草原が、少しづつなだらかな丘へと変わってきています。幾つもの低い丘が重なり合って、柔らかな線を描いているんです。所々では小さな木立も見え始め、景色はいつそう豊かになってきていました。

太陽は、急いで北の空を転げ落ちていきます。早く、西の地平に入って休みたいでしょう。何だか、あつと言う間に夕方が来てしまっているようです。

ラッセンは、さっきから黙って窓の外を見ています。でも、風景を眺めているようには見えません。アンジェレッタは、その黒い瞳に映る光を見つめて、少しでも勇気を出して尋ねていました。

「ラッセン…何を考えてるの？」

「え？ あつ、うん…ごめん。アンジェレッタを一人にしちゃった

ね」

慌てて振り返ったラッセンに、今度はアンジェレッタが急いで左右に首を振ってしまいます。

「ううん！ ごめんなさい、そんなつもりで言っただんじゃないの…ごめんなさい、考え事を邪魔してしまって…」

「邪魔なんかじゃないよ。アンジェレッタと話すことは、他のどんな事よりも楽しいからね」

「ラッセン……」

二人とも、少しの間、黙ってしまいます。でも、やがて、ラッセンは変に乾いてしまった唇を少し舌で湿らせると、話し出していました。

「僕はね、この汽車がいつたい何処まで行くのかな、って考えていたんだよ。でも、きつと『何処』なんて言える『場所』は無いんだろ？ な、って… だったら、この汽車は何処からも出発していないし、何処にも行くことはないんだろ？ …そう思ってたんだ」

「ラッセン！」

驚いた顔で、アンジェレッタは真っ直ぐラッセンの目を見つめていました。ええ、そうです。それは、ついさっき、アンジェレッタが考えていた事と同じだったんです。

「わたしも、同じような事を考えていたの。この草原は何処から続いている、何処まで広がっているのかしら、って…でも、『場所』が無いのなら、この草原は何処にでもあつて…きつと、何処にも無いのかも知れない…そんな事を思っていたの」
「そうだったんだ…同じ事を考えてたんだね」

にっこりと笑いかけてくれます。なんて温かいんでしょう。偶然でも、アンジェレッタには嬉しかったんです。いいえ、《本当》には『偶然』なんて存在していないのですが…

「でも、僕には分からないんだ。もしもそうなら、僕やアンジェレッタは、どうしてこの汽車に乗って、この景色の中を走ってるんだろ？ 『何』がそこには存在してるんだろ？」

アンジェレッタにも、分かりません。

「あつ、そうだったね。アンジェレッタも、さつきよく分からない、
って言ってたよね」

「ええ……」

「何も存在などしていません。ただ、あなたがたはそうしなくては
ならないから、この汽車に乗って、この景色を眺めているのですよ」
不意に、深くて静かな声が通路の向こうから聞こえてきました。

「アンナさん！ 戻って来れたんですか？」

ラッセンが、驚いて叫んでいます。だって、さつきアンナさんは、
あのクスノキのそばに立っていたんです。あれから、汽車は一度も
停車していません。

「ええ。戻って来たいと思うなら、人はあらゆるところに戻ること
が出来るものなのです」

計り知れないほどに穏やかな微笑みは、アンジェレッタやラッセ
ンの混乱していた心を、すっかり鎮めてしまいました。

「アンナさん……どうして、わたしやラッセンは、こうしていなくて
はならないのですか……？」

アンジェレッタの小さな問いかけにも、アンナさんはこころよく
応えてくれました。

「では、アンジェレッタはこの旅をやめてしまいたいのか？」

「いいえ、そんなことはありません！」

思わず、力強くアンジェレッタは答えていました。ラッセンと一
緒にいられるのなら、アンジェレッタは永遠にこの汽車に乗って、
無限の果てまで行っても構わないと思っています。

「僕も、ずっとアンジェレッタと一緒にいたいと思っています」

「ラッセン……」

少し照れながら、でも真剣にラッセンはそう言ってくれたんです。
アンジェレッタは、とても嬉しくて……青い瞳にうつすらと涙を浮か
べてしまいました。ラッセンも、一緒にいたいと思ってくれている
んです。こんなに幸せなことが他にあるでしょうか。

「あなたがたが、そう思っているからこそ、汽車はこの景色の中を走っているのです」

アンナさんは、優しい微笑でそんな二人をそつと見守っていました。

窓から斜めに射し込んでいる光芒は、アンナさんの透き通る金の髪を眩しく輝かせています。アンジェレッタとラッセンは、それ以上は何を言っても、疑問を口にしてもいけないような気がしました。《真実》は《全て》目の前にあったんです。それが何よりも素晴らしい、最良の疑問であり、応えだったんです。

汽車は、音も無く滑り続けています。下り始めた太陽に照らされながら、どんどんと南の方へと…自らが生まれてきた方向へと、汽車は速度を早めていました。

今日一日、北の空をえつちらおつちらと昇り、頂上で昼寝をした後、駆け足で坂道を転がり落ちていた太陽は、ようやく地平線にたどり着こうとしていました。

アンジェレッタの瞳のように、高く、青く澄み切っていた空は、今は淡く柔らかな茜色に染まっています。とっても温かそうで、見ていると、心がふんわりとしてくるんです。空から降ってくるその光は、通路の向こう側にある窓からふわぁと汽車の中にも入り込んできていました。

ラッセンとアンジェレッタは、お互いに顔を見合わせるとにこつと笑って席を立ちました。急いで、通路の反対側の席に移ります。でも、その時ラッセンはびっくりしたように言いました。

「アンナさん、何処に行ったんだらう？」

ええ、そうなんです。いつも座っていた席にはいなかったんです。いいえ、それどころか、この車内の何処にも、アンナさんの姿はありませんでした。

「…ううん、違うわ。アンナさんは、何処にも行っていないのよ」
アンジェレッタは、そう言ってラッセンに笑いかけました。

「わたしたちの言葉では、『ここ』にいないの…でも、アンナさんは何処にでもいるのよ。アンナさんがいなくてはならない所に…ね」
「…そうだね」

ラッセンは頷くと、アンジェレッタの手を取って窓辺に近付きました。

不意に、水の流れる音が、はつきりと耳に届いてきます。二人は草がさやさやとなびく丘を目にしたと思った直後、窓の外にとても大きな川を見付けていました。

川は、右手の地平線の向こうから流れています。夕焼け色に燃える空から、綺麗な線を描いて流れ出しているんです。そして、それは汽車のすぐ傍を通り過ぎて、左手の空へと帰っていました。

「大きいね…」

それ以上、言葉が浮かんできません。夕陽の下の対岸が、随分と遠くに見えます。そのとてつもなく広い岸の間を、考えられないくらいたくさん水が、とうとうと流れているんです。

地平へと隠れてしまいそうな夕日で、その川の水は黄金色に輝いています。目を開けて見ていられないくらい、眩しいんです。なんて綺麗なんでしょう。一時も静止すること無しに、光は次から次へと変化していくんです。そして、その輝きは、少し前の輝きよりも更に美しいものになっていました。

「……………」

アンジェレッタは何かを言おうとして…でも、やめてしまいました。何だか、声を出してはいけない気がします。こんなに大きくて、こんなに綺麗なのに…この川は、とても静かなんです。もしもアンジェレッタが口を開いても、きっとその声は押しつぶされて、この深い静寂の中に溶け込んでしまうことでしょう。

その時、窓枠に置かれていたアンジェレッタの小さな手を、温かなものが包み込んできました。見れば、ラッセンの手なんです。森に住んでいたためでしょうか。その手は、十歳にしては大きく、がつしりとしています。

(ラッセン……)

この夕焼け空のように、温かいんです。ええ、本当に温かいんです……

さっきまで、アンジェレッタは『自分』が変わってきたような気がしていました。でも、このラッセンの手を見て思っただんです。本当に、自分は変わったんでしょか？ この手は、ラッセンの手の中にあることが《本当》なんです。なら、自分も、ラッセンのために変わっている限り、そのどれもが『アンジェレッタ』という本当の『自分』なんです。

……きつと……『自分』は、『ラッセン』のなかにあるのでしょうか

……
もう、自分が分からなくなることも、自分を探すことも無いはずですよ。いつでも……ええ、そうですね。いつでも、こんなに近くで見付けられるのですから……

「アンジェレッタ……」

優しい声がします。アンジェレッタは、夕焼けの茜色よりも、もっと鮮やかに頬を赤く染めながら、もう一方の手をラッセンの上に重ねていました。

「……ありがとう……いつも傍にいてくれて……《本当》にありがとう……」

そう呟くと、アンジェレッタは心の奥から流れ出す黄金色の想いのままに、そつと……でも、しっかりとラッセンの手を握り締めていました。

夕日が、川の向こうへと沈んでしまします。でも、茜色は空に残り、もうしばらく、幸せな二人の姿を柔らかく照らし続けてくれました。

『夕陽の川辺』 おわり

8・星空の駅

やがて、とつぷりと日も暮れてしまい、汽車の外はあつと言う間に真っ暗になってしまいました。

星が、その深い藍色の天井で瞬いています。でも、アンジェレッタにはどの光が一番星だったのか分かりませんでした。だって、みんないつせいに、わっと飛び出してきたんですもの。

二人が星空をもつとよく見ようとした時、汽車がその速度をゆっくりと落とし始めました。大きな震動も、耳に入る音も無いままに、汽車は小さな駅に止まるうとしているんです。天井で揺れる夕陽色のランプは、窓からその駅舎の白い柱を微かに照らし出していました。

静かに、本当に静かに汽車は停車します。二両しかない汽車にふさわしい、とつても小さくて可愛い駅なんです。でも、温かな夕陽色の光に照らされてはいても、誰もいない駅はちよっぴり怖い感じがしています。

「降りてみようか、アンジェレッタ」

でも、ラッセンは平気な顔でそう言ってくるんです。にっこり笑ってるんです。

「ラッセン……」

微かに声を押し出した瞬間、少し震えている細くてしなやかな指先を、ラッセンはしっかりと握ってくれました。

……ええ、ラッセンと一緒になら、恐いことなんて何もありません……
真っ直ぐに、アンジェレッタはラッセンの顔を見上げて微笑んでいました。

「ほら、気を付けて」

通路を抜け、扉から降りる時、ラッセンが先に立って足を踏み出しています。そのつま先が石の床に触れた途端、アンジェレッタは

高く澄んだ、でも音にはなっていない《音》が周囲に広がった気がしました。それと同時に、ラッセンの足を中心に、青い光の輪が広がりはじめたんです。

「うわぁ……」

その透明な青の光で駅全体が輝いていくのを、ラッセンは茫然とした顔で見つめていました。駅に降りることなんて、すっかり忘れてしまっています。青白く、駅の内側から放たれる光は、そんなラッセンとアンジェレッタをそっと、でも温かく包み込んでいました。どれだけの間、動かさずそうして見つめていたのでしょうか。アンジェレッタにもラッセンにも、よく分かりませんでした。でも、『何か』が二人を同時に動かしてくれたんです。ラッセンはもう一つの足もホームに下ろすと、アンジェレッタを振り返りました。

「……なんて綺麗なんでしょう！ ラッセンは、少しの間、息をすることも忘れてしまいました。何だか、初めてアンジェレッタを見るような気がします。そのアンジェレッタがそっと白くて美しい足を駅に下ろした瞬間、今度は青白い光の中に無数の煌きが生まれてきました。」

銀色の星達が、空の仲間に負けないよう、一生懸命に輝いています。青い光に抱かれながら、その地上の星屑達はアンジェレッタの姿をいつそう綺麗に照らし出していました。

（アンジェレッタ……）

少し驚きながらも、微笑んでホームに降り立っています。でも、じつと自分を見つめたまま黙っているラッセンに気付くと、アンジェレッタは恥ずかしそうに視線を落としてしまいました。

「どうしたの……ラッセン？」

「ううん、その……綺麗、だよ……アンジェレッタ」

「ラッセン……！」

二人とも、これ以上無いくらい真っ赤になってしまいました。でも、その時、アンジェレッタは自分でも驚いたことに、少し濡れた瞳でラッセンを真っ直ぐ見上げていました。

「ありがとう…ラッセンも、とても素敵よ…」

虹の海辺でも、ラッセンは同じ言葉を言ってくれました。でも、同じ言葉なのに…『同じ』ではないんです。アンジェレッタには何が違うのか分かりませんでした。今のラッセンの言葉の方が、もっとも嬉しかったんです……

「ありがとう…じゃあ、行こうか」

「ええ」

アンジェレッタはラッセンに安心して手を預けると、その腕に少し寄りかかりました。ラッセンも、力強く抱え込んでくれます。

二人は、そつと、でも確かな足取りで駅舎から草原へと歩いて行きました。

駅から伸びる細い砂利道は、真っ直ぐ、小高い丘へと続いていきます。道の左右には、アンジェレッタと同じくらいの丈をした木が並んでいて、じつと、何も言わずに歩く二人を見つめていました。

やがて、不意にその並木が無くなってしまいます。それと同時に、アンジェレッタとラッセンの目には無数の星の輝きが飛び込んできました。さまざまな色をした砂粒が、広い天井にびっしりとまき散らされているんです。しかも、これらの星は二人が知っているどんな星とも違っている気がします。もつと、若々しくて、明るくて、大きいんです。星達の並びも、二人には見慣れないものでした。

足下からは、しゃらしゃらと砂利を踏む音が立ち上ってきます。

二人はずつとそんな星達の煌く空を見上げながら、丘の上まで来るとようやく足を止めました。

何も言わずに、そつと腰を下ろします。

鮮やかに瞬く光は、アンジェレッタの青い瞳とラッセンの黒い目を捕まえて、なかなか放そうとはしてくれませんでした。

「凄いね…星つて、こんなにたくさんあったんだ」

「ええ…」

何だか、これだけじつくりと夜空を見上げたのは久し振りの気がします。とっても綺麗で、懐かしくて…ほら、もうすぐそこに、手

が届く所に見えているんです。ちょっと背伸びをすれば、きっと頭をぶつけてしまうに違いありません。

そんな感じがするからでしょうか。アンジェレッタもラッセンも、とても小さな声で話していました。そして、時々、お互いを真っ直ぐ見つめては幸せそうに微笑みを交わしています。

その時、東の空から少し青白い光が広がり始めました。

大きな翼は天井を駆け上り、星の輝きを僅かに弱めてしまいます。アンジェレッタとラッセンが驚いて目を向けた途端、波打つ丘の上から、不意に一筋の銀色の光芒が走り出しました。

月が昇ろうとしていたんです。

ほとんど強くなる銀色の光の波に照らされながら、アンジェレッタもラッセンも、ふと口を閉ざして黙り込んでしまいました。

とつても遠い『時間』が思い出されます。

（わたしは、初めてラッセンを見た時も……）

ええ、そうです。その時、ラッセンは銀色の月の光の中で、少し寂しそうに踊っていました。今と同じように、綺麗な月の夜にアンジェレッタは初めてラッセンと出逢ったんです。

ラッセンも、覚えています。アンジェレッタのために教会へ行った時、月はその銀色の腕でそつと見守ってくれました。アンジェレッタのお兄さん、フィオラに会った時にも、月はその後ろで輝いてくれていたんです。

「……いろんな事があったね……」

随分としてから、ラッセンはそう呟きました。アンジェレッタも、そつと頷きます。

「ええ……楽しかった事も、そうでなかった事も……本当に、たくさんあったわ……」

そう言ったアンジェレッタを、ラッセンは真面目な顔で見つめました。

「うつん、違うよ。アンジェレッタ……今から思えば、どれもが楽しい事ばかりだったんだよ」

そんなラッセンを見上げながら、アンジェレッタは少しだけ恥ずかしそうに囁きました。

「…そうね……」

再び、沈黙が二人を優しく包み込んでしまっています。

その間も月は昇り続け、黙ってしまったアンジェレッタとラッセンにそつと青い波を送り出していました。

沈黙は、どれだけの間、二人の『言葉』を伝えたことでしょうか。黄金の揺らめきに纏われた声無き存在は、二人の心をそつと往復しては、いつそうその煌きを増していきます。

その『言葉』に抱かれながら、やがて、ラッセンは大きな決心をしました。

静かに、ポケットの中に手を入れます。でも、驚いたことに、そこには目的のものしかありませんでした。あの、アンジェレッタのお兄さんからもらった紙切れが無くなっていました。

少し、手を止めてしまいます。でも、ラッセンは一人で小さく頷くと、そのまま手を握り締めてポケットから出しました。

ええ、ラッセンには、何だかあの紙が無くなっても当たり前のように思えたんです。あの紙は、もうラッセンのポケットに存在する理由が無くなったんでしょう。

ラッセンは手をしっかりと握り締めたまま、その黒く澄んだ瞳に真剣な色を浮かべ、隣りに座るアンジェレッタを見つめました。

「アンジェレッタ……」

「どうしたの、ラッセン……」

清らかな青の瞳が、真っ直ぐに見つめ返してくれます。その前でラッセンは大きく息を吸い込むと……手をそつと差し出しました。

「これを…受け取ってもらいたいんだ……」

アンジェレッタは、そこに可愛らしい髪飾りを見付けていました。ええ……ラッセンがエルサ姉さんのために、何ヶ月もかけて作り上げた、あの髪飾りなんです……

「ラッセン……!」

これは、ラッセンにとって、ものすごく大切なものなんです。それを……

なんて言えばいいのか分からずにいるアンジェレッタの前で、ラッセンは静かに、ゆっくりと噛み締めながら言葉を紡ぎました。

「僕は、アンジェレッタと一緒にいたいんだ……ずっと、ずっと一緒にいたいと思ってる……だから……今は、これをアンジェレッタに着けてもらいたいんだよ」

ええ……勿論、エルサ姉さんを忘れるつもりなんかありません。でも、姉さんは姉さん、アンジェレッタはアンジェレッタなんです。今は、ラッセンはアンジェレッタにこそ、この髪飾りを着けてもらいたかったんです……

もう、それ以上はうまく声に出来ません。でも、『言葉』はラッセンが考えているよりも、もっと多くの事をアンジェレッタの胸に届けてくれました。

それでも……アンジェレッタはしばらく迷ってしまいました。自分に、この大切な髪飾りをもらう資格があるんでしょうか……

アンジェレッタはその視線を手の中の髪飾りから、ラッセンの瞳へと移しました。そこには、深くて重い……今までに見たことが無いくらいに真剣な光が宿っているんです……

「……………」

黙ったまま、アンジェレッタはそっとラッセンの手を、自分の両手で包み込みました。そして、その手の温もりを惜しむように、ゆっくりと指を放していきます。髪飾りを伴いながら……

微かに濡れた青い瞳は、じっと髪飾りを見つめています。

ラッセンも、何も言えません……

また、しばらくの時間が流れていきます。

やがて、アンジェレッタはその髪飾りを、左耳のすぐ上に留めていました……

ラッセンは、何も言えそうにないのに……でも、何とか言葉を見つけて出そうとしていました。そして、少し震えながら見上げてくるア

ンジェレッタに向かつて、ようやく短い言葉を押し出したんです。

「『大好き』だよ、アンジェレッタ……」

「……わたしもよ、ラッセン……」

頬を淡く染めながら、でもアンジェレッタは目を逸らさずに囁いていました。

ずっと、ずっと……二人は互いの瞳を見つめ続けています……

……やがて、アンジェレッタはそっとラッセンの肩にもたれかかっていました……

月の光は、新しい『時間』に改めて認められた二人を、その銀色の幕で柔らかく包み込んでいきます。アンジェレッタとラッセンの心の中には、その波の煌きが、いつまでもいつまでも広がり続けていました。

『星空の駅』おわり

9・高原の汽車

ふと、アンジェレッタは心地好い震動に気付いて目を覚ましました。

青い瞳の中に、明るい光が射し込んできます。

いつのまにか、アンジェレッタは汽車の中へと戻っていたんです。でも、何かが違っています。床板は新しく、まだ、おろしたての匂いがしています。天井の明かりも、前より温かく、ずっと綺麗に輝いているんです。腰掛けている座席だって、ふんわりと優しくアンジェレッタの体を支えてくれていました。

車内だって、広くなった気がします。でも、それなのに、昨日までの汽車と同じようにも思えるんです。

アンジェレッタがもつと周りを見ようと立ち上がりかけた時、すぐ隣りにラッセンの姿が浮かび上がってきました。

でも、ラッセンも少し変わったみたいです。前よりも、もっと優しさと力強さに満ち溢れているんです。その黒い瞳には、生命の煌きがいつそうの眩しさをもって感じられました。

いいえ、ラッセンだって驚いていました。髪飾りを着けてくれているアンジェレッタが、何だかとても美しく輝いて見えるんです。その体の内側からは、白く透き通った光の波が流れ出しているような気がします。とっても、とっても……アンジェレッタは素敵に見えました。

黙ったまま、アンジェレッタは座りなおしています。その頬には赤みがさし、愛らしい口許には素晴らしい微笑が浮かんでいるんです。ラッセンも、そっと、静かにアンジェレッタの指先を取りながら微笑みました。

暖かくも寒くもない日の光は、南への道を辿りながら、大きな窓から中を覗き込んでいます。そこには、金色の波に洗われた、幸せそうな二人の姿が映し出されていました。

汽車は、太陽の下に見える山々を目指して、次第に高原の中を走
るようになっていました。灰色の小さな石が積まれ、若々しく鮮や
かな緑の牧草地を囲んでいます。所々にリンゴの木が立ち、その木
漏れ日は草地に見事な絵を描き出していました。

でも、牧草地にも牛や羊といった家畜の姿が見えないんです。い
いえ、それどころか、人の住んでいる家すら何処にも見つかりませ
ん。

「誰もいないのかしら……」

窓辺から覗くアンジェレッタがそう呟いた時、何か微かな音色が
聞こえてきました。

「あれは……鈴の音だね」

ええ、そうです。今はアンジェレッタにもはつきりと分かりまし
た。カラン、コロン……大きな、のんびりとした鈴の音がするんです。
あの鈴は、きつと牛の首に吊り下がっているのでしょう。牛の姿は
何処にも見えませんが、アンジェレッタには、ゆっくりと草
をはむ牛達の姿がはつきりと観えていました。

汽車は、黒いくらいに青い空の下を、涼しい風と共に走っていま
す。窓を開けて首を伸ばすと、目映い陽射しの中で、行く手には雪
をかぶった山々が見えていました。蒼く霞んだその峰の上には、純
白の、目も覚めるような雲が幾つかぼっかりと浮かんでいます。汽
車は、真っ直ぐにその山々へと向かって進んでいました。

もう少しすれば、最初の山のふもとに辿り着くことでしょう。

アンジェレッタとラッセンは、ずっと手を握りあったまま、並ん
で窓の外を眺めていました。

とっても高くて、いったい何処にあるのか想像も出来ないような
青空が、汽車の上に広がっています。見上げていると、気が遠くな
りそうなんです。アンジェレッタは、ちょっと怖くなって視線を下
ろしてしまいました。

そんな空の青を映している瞳に、緩やかに右へと曲がっていく線路が飛び込んできます。進行方向から射してくる太陽の光に、その道は白く、銀色に輝いて見えました。丈の短い草々に囲まれ、他の何よりもくつきりと浮き上がって見えるんです。その線路の脇には、濃い緑色の木々が、まるで絵のように立ち並んで風に揺れていました。

何だか、夢の中でしか知らない景色みたいです。ほら、みずみずしい草葉に隠れて咲いている白や黄の小さな花なんて、まるで星のように光を放っているでしょう？ その星達は、通り過ぎていく汽車に向かって、たくさんの色や輝きを見せてくれています。

…ええ、これはきつと『夢』なんでしょう。きつと、そうなんです……

でも……『夢』って何なんでしょう……？ こうして、ラッセンと一緒にいられる事も、『夢』なんでしょうか……

ちよっぴり恐くなって、アンジェレッタはつないだ指先に力を込めてしまいました。

そうです……もしも夢なら……いつかは、覚めてしまつかも知れないんです……

「どうしたんだい？ アンジェレッタ」

優しい声が、そっと包み込んでくれます。でも、アンジェレッタには応えられませんでした。こんな話を話してしまったら、夢から覚めてしまいそうなんです……

「この世界と『夢』とは、共に『同じ』ものですよ、アンジェレッタ」

不意に、背中から重くて深い言葉が聞こえてきました。アンナさんです。

すぐるような表情で振り返ったアンジェレッタに、アンナさんは静かに微笑んでいました。

「『夢』は、それ自身が一つの世界なのです。そこへ入り込んだものが望まない限り、覚めることなどありません。《影》の世界で

は夢は覚めてしまうものですが、それは《本当》の『夢』ではなく、《影》の言葉に従えば『幻』なのですよ。この世界では『夢』は幻ではなく、『実際の世界』なのです」

……なら、安心していいはずですよ。だって、アンジェレッタは絶対にラッセンと一緒にいられるこの『夢』を、やめようなんて思わないんですから。

「……幻でなくて……本当に、よかった……」

「え？」

きょとした顔で、ラッセンが覗き込んできます。その様子に、今度はアンジェレッタが驚いてしまいました。

「ラッセン、アンナさんのお話を聞かなかったの？」

「アンナさんなんて、いないよ？」

ラッセンたら、そんな事を言うんです。ですから、アンジェレッタは通路の向こう側の席を示して……

でも、とっても驚いた事に、そこにはアンナさんはいませんでした。

「アンナさん……」

何処に行ってしまったんでしょうか。

「そこにいたんだね？ アンジェレッタ」

「ええ……」

嘘じゃありません。でも、信じてくれるでしょうか……

アンジェレッタが見上げる先で、ラッセンは柔らかに笑ってくれていました。

「じゃあ、アンジェレッタの『場所』とアンナさんの『場所』が重なったんだね。だから、アンジェレッタには見えただ」

それ以上、ラッセンは何も聞いてきませんでした。アンナさんは、アンジェレッタだけに『何か』を話す必要があったんです。それを、もしもラッセンにも聞かせたいのなら、きっと、アンナさんの姿はラッセンにも見えていたことでしょう。勿論、ラッセンはアンジェレッタが嘘についているなんて、これっぽっちも思いませんでした。

「ありがとう…ラッセン……」

アンジェレッタも、小さくそう呟いただけでした。

こんなラッセンと一緒にいられて《本当》によかった…これが幻でなくて《本当》によかった……

アンジェレッタは、心からそう思っていました……

雪を戴く峰々の手前に、低くて小さな山が連なっています。その中の一つを、汽車は中腹目指してゆつくりと登り始めていました。所々、薄い緑の敷布を裂いて、茶色い地肌が見えています。ほら、右手の谷底では、白くて清らかな雪も、まだ解けずに残ってるんです。でも、この世界で、雪が降ったり融けたりするんでしょうか。南へと昇っている太陽からは、とても『冬』の気配なんて感じられませんでした。

「きつと、そうじゃないと思うよ、アンジェレッタ。冬じゃなくて、必要があれば、雪は降ってくるんだよ」

「…ええ、そうね」

だって、『時間』があるからこそ『冬』は巡ってくるんです。『時間』が無ければ、季節なんて生まれるはずがありません。

二人には、けっこうな急斜面に見える所を、汽車は着実に登っていきます。草々の間にはタンポポの花が咲いていて、それは黄色く愛らしい模様を描きながら青い山を彩っていました。

少し、開けた所に出きます。青く霞んでいた高い山々も、とても近く感じられるんです。銀色の岩肌の上で、白い雪のじゅうたんは眩しいくらいに輝いていました。

汽車の窓のすぐ下からは、タンポポが無数に咲き誇っています。黒いくらいに濃くて、でも明るい緑の葉をした森の傍まで、その黄金色の海は広がっているんです。燃え立つような金色の光は、涼しい高原の風に吹かれて、ゆったりとした波を作り出していました。アンジェレッタは、その可愛い草原を微笑んで見つめていました

が、ふと何かに気付いて空を見上げました。

なんて透き通ってるんでしょう。本当に、この青空には果てなんて考えられません。きっと、この世界では《本当》に何処までも続いているんです。すぐそこにもありそうなのに、でも、手を伸ばしても触れないんです。

自分の瞳にそっくりな青空へと目を向けた時、アンジェレッタはそこに小さくて、でもとっても鋭い『何か』を見付けた気がしました。じっと見ていると、それは光っているんです。星だったんです！アンジェレッタは、思わずどきっとして両手でラッセンの腕を掴んでしまいました。何だか、見てはいけないものを見てしまった気がしたんです。でも、目が放せません。ええ、どうしても放せないんです。

昼間の星は、とっても白く見えます。だからでしょうか、アンジェレッタにはこの青空が真つ黒な夜の闇に思えました。不意に、夜に引き戻された気がするんです。

「アンジェレッタ……」

ラッセンの温かい声がします。でも、アンジェレッタには口を開くことも出来ませんでした。

「……どうして、こんなに美しく澄んでるんだろうね。雲だって、まるで水分を含んでないみたいだよ……星が見えたって、当然かも知れないね」

「ラッセン！」

アンジェレッタは驚くと、黒い瞳を見上げていました。ええ、そうなんです。ラッセンも、同じものに気付いていたんです。

「……わたし、見てはいけないものを見たんだと思ったの……でも、そうじゃなかったのね……」

「アンジェレッタ……」

悲しそうに、アンジェレッタはラッセンに笑いかけました。

「今まで、わたしが気付いていなかっただけなの……きっと、もっといろいろなことも、知らないでいたんだと思うわ……」

昼の空にも、その向こうでは星が煌いているんです。アンジェレッタは、今までその事を《本当》には知っていませんでした。同じようにして、いったいどれだけのことを見逃してきたことでしょうか……でも、それはこれから知っていけばいいんだよ。今までのアンジェレッタが間違っていたんじゃないんだ。自分ばかりを責めたら駄目だよ、アンジェレッタ……」

優しいんです……本当に、とっても優しいんです……

「……ありがとう……」

少し、清らかな青い瞳が濡れています。アンジェレッタは、視線を落とすと、ラッセンにすがりついていました。

さまざまな色彩に埋もれながら、汽車は山の頂上を目指して走っていきます。ゆっくりと、ゆっくりと……でも、着実に汽車は進み続けていました……

『高原の汽車』 おわり

10・風の山

ところが、とても残念なことに霞が出てきたようです。左右に見えていた雪に煌く山々は、少しずつその姿を隠そうとしています。青かった空も、白くぼんやりとした雲で覆われてしまいました。

そろそろ頂点に辿り着こうとしていた太陽も、その光をうつすらと滲ませてしまいます。ちょっと悲しくなつて、アンジェレッタとラッセンは互いに顔を見合わせました。

汽車は、もう随分と高い所まで登つてきています。後ろを振り返ると、あの素晴らしい草原がとても遠くに見えるんです。木々も小さくて、まるで砂粒のようです。その薄い若葉色になってしまった草の原に、細く銀色に輝く線路だけが、二人の目にもはつきりと分かりました。

それでも、こんなに高い所まで来ているのに、あの虹の海は見えてきません。そんなにも遠い場所から、一緒に汽車で旅をしてきたんです。そして、その旅はもっともつと、これからも続いていくんです。二人で、一緒に……

それがどれだけ幸せなことか……ラッセンが瞳を下げると、その視線はアンジェレッタの微笑みにぶつかりました。少し恥じらいながらも、ラッセンもアンジェレッタも、素敵な微笑を浮かべて小さく頷いています。ええ、そうですね。ずっと、ずっと一緒なんです。それが《本当》なんです。

その時、少し汽車の速度が遅くなりました。ゆつくりと、止まるうとしています。顔を出して前を見ると、白い柱の並ぶ小さな駅舎が二人の目に入りました。

「降りてみようか、アンジェレッタ」

「ええ」

アンジェレッタの細く美しい指先をしっかりと握りながら、ラッセンはすぐに通路に出て、広くなつた車内を扉へと向かいました。

外に飛び出した瞬間、爽やかな風に包まれます。駅を囲む草々も、その風に身をなびかせながら心地好い歌をうたってるんです。…でも、駅の中は少しだけ静かな雰囲気になりました。薄く力を弱めた太陽に照らされて、微かに輝いている純白の柱のためでしょうか。でも、その沈黙は怖いものではなく、温かな安らぎでいっぱいだったんです。

アンジェレッタとラッセンは、黙って駅の外へと向かいました。左手に、今までずっと汽車が目指していた山の頂上が見えています。とっても短い草に覆われたその斜面は、簡単に登っていけそうな気がしました。

「行きましょう？ ラッセン」

「よし」

ずっと、六年間も部屋から出られずにいたなんて思えない元気さで、アンジェレッタは歩き出しています。道なんてありません。でも、アンジェレッタにもラッセンにも、登っていくべき『道筋』は分かっています。

強い風の下、一歩ずつ足を出していきます。小石が多く、思ったよりも歩きにくそうです。

「ほら、気を付けて！」

転びそうになったアンジェレッタを、慌ててラッセンは支えていました。二人の手は、今もずっと離れずに互いを握り締めています。

「ごめんなさい、ラッセン…」

小さな声に、ラッセンは快活に応えていました。

「ありがとう、だよ。アンジェレッタ」

「…ありがとう……」

アンジェレッタは嬉しそうに微笑むと、ラッセンの手を、もっと強く握っていました。

すぐに、また歩き出します。急な斜面で幾度転げ落ちそうになっても、二人の指先は絡まったまま、絶対に離れることはありませんでした。

もう、随分と登ってるんです。後ろを振り返ってみると、駅舎の白い屋根もとても小さくなっています。停車している二両の汽車が、おもちゃのようにしか見えなくて、ちょっとアンジェレッタは恐くなってしまいました。

急いで、前に向き直ります。すると、ハイマツのくすんだ緑色の群生が目飛び込んできました。もう、すぐそこで幹を地面に這わせてるんです。あの中に入っていくんでしょうか。道は無いのですから、作るしかありません。あのちくちくしそうな木の中に、道を作るんです…

ラッセンも、ちょっと考え込んでいました。頂上は、右手に見えています。ハイマツは頂上のすぐ下辺りでは無くなっているんです。あそこまで、回っては行けないのでしょうか。

じつと、回り道を探してみます。ここから見る限り、ラッセンには危険そうな所は見付けられませんでした。もう一度確かめてから、傍で待っているアンジェレッタに振り返ります。

「アンジェレッタ、ここから真っ直ぐ右に曲がって、遠回りをして頂上に行こうか」

「ええ」

ラッセンは、きちんと自分の事も考えてくれて、そして尋ねてくれたんです。アンジェレッタは、すぐに信頼しきった目で頷きました。

この山の尾根は、左の方から少しずつ上がって頂上に向かっていきます。二人はしっかりと手を握りあったまま、その尾根から吹き下りてくる風に抱かれて右に曲がって歩き出しました。

透明な緑色をした草々を踏むたびに、ふわっと強い香りが立ち上ってきます。風にあおられて地面に頭をつけようとしているのに、草の間から聞こえる歌声はとても優しく心地よいものなんです。黒く豊かな髪を激しく乱しながら、アンジェレッタはその音色に耳を澄まし、そっと微笑んでいました。

やがて、頂上がすぐ上に見えてきます。もう、周りにはハイマツもありません。ここからは真っ直ぐ、あの頂上まで行けるはずです。「もう少しだからね、アンジェレッタ」

「ええ。ラッセンこそ、大丈夫？」

自分をずっと風や小石から守ってくれていたラッセンに、アンジェレッタは心から心配して尋ねていました。でも、ラッセンは屈託も無く笑っています。

「平気だよ。ありがとう、いつも心配してくれて」

慌てて、アンジェレッタは首を左右に振っていました。そんな、ラッセンを心配するなんて『当然』なんです。

ラッセンは、いよいよ微笑みを深めています。その幸せそうな笑顔に、アンジェレッタも嬉しくなっていてこれ以上無いくらいに素敵な笑顔を浮かべていました。

並んで、頂上へと足を踏み出します。幸運にも、灰色の石が少し不規則な階段を作ってくれているんです。アンジェレッタとラッセンは、交互に足場を確かめながら、慎重に一步步登っていききました。

もう少しで頂上です。ラッセンはその視線を下ろした後、今までのように石に足をかけていました。

でも、その石はしっかりと土の中に入ってなかったんです！ぐらつと大きくラッセンの体が揺れたかと思うと、石と一緒に落ちていくと……

「ラッセン！」

アンジェレッタは、両手でラッセンの手を掴むと、必死になっがみついていた。目をきゅっと閉じて、力いっぱい、ラッセンの手を握り締めているんです。自分も下に落ちそうになりながらも、アンジェレッタは決して手を放そうとはしませんでした。

不意に、力が抜けてしまいます。アンジェレッタは、まだしっかりとラッセンの手を掴んでいることを確かめながら、こわごわと黒

い瞳を開けました。

目の前で、ラッセンが感謝の色を満面にたたえて笑っています。ええ、ちゃんと傍に立っていてくれたんです。アンジェレッタはその無事な姿を見ても手を放さず、ちょっぴり涙を流してしまいました。

「ごめんね、アンジェレッタ。大丈夫かい？」

ええ、大丈夫です……

ラッセンが無事でいてくれたのが嬉しくて……でも、さっきの場面はとても恐くて……アンジェレッタは、しばらく声も出さずに泣いていました。その時、しっかりと握っていた両手の上に、温かなものが添えられます。霞んだ目に見えたのは、ラッセンのもう片方の手でした。

「ありがとう……ありがとう……」

ラッセンの、真剣な表情が聞こえてきます。

二人は、しばらくそのまま動こうとはしませんでした……

ようやく、頂上に辿り着きます。でも、その途端、アンジェレッタとラッセンは物凄い風に吹き飛ばされそうになりました。

登ってきた斜面の反対側は、とても切り立った崖になっています。はるか下の方から、風は容赦なく吹き上がってきます。

二人は急いで、傍に幾つも立っていた黒い石に掴まりました。

これで、やっと周りを眺める事が出来ます。

「わ……ああ……」

そんな声を漏らした後、アンジェレッタもラッセンも、もう一言も口にする事は出来ませんでした。

なんて、素晴らしい風景なんでしょう！ 風が駆け昇ってくる崖の下には、とっても大きな森が広がっています。その淡い緑色の波は、左手に見える山並の裾野を緩やかに覆った後、遠くにそびえる雪山まで延びているんです。雪山の広い足元は白く霞み、上へ行くほど少しずつ青みを取り戻しながら、柔らかく二人の視線を受け止

めていました。

そこから右手は、ずっと白い幕に隠されて、何も見えていません。まるで、風に流れる海みたいです。黒い岩にしっかりとしがみつ き、片手にはアンジェレッタの指先を握り締めながら、不意に、ラッ センはその白い波の向こうに美しい山脈を認めていました。

たなびく靄の中から、青く染まった山頂が姿を現しているんです。その素肌には汚れ一つ無い、純白の雪のレースが掛けられています。なんて美しいんでしょう…その山々は静かに、ただ黙って佇んでい ます…

（綺麗だね…）

まるで、アンジェレッタみたいです…

でも、ちょっと冷たいかも知れません。いいえ、優しくも見えま す。

ラッセンには、どんな『単語』で表現すればいいのかわかりませ んでした。それなのに、山脈はあらゆる『言葉』で話しかけてくる んです。そつと、深く、厳しく、慎ましやかに…

「きつと…神さまは、あんな素敵なおところに住んでおられるのね ……」

アンジェレッタの、とっても微かな声が聞こえてきます。目にす ることは出来るのに、あの山々はどんなに遠く離れていることでし ゃう。

アンジェレッタの青い瞳には、いつしか憧れの光が浮かび上がっ ていました。

「行ってみたいね…」

ラッセンも呟いています。アンジェレッタは、その言葉が嬉しく て、そつと握った指に力を込めていました。あの厳かで美しい峰に、 いつか行くことが出来るのなら…

…ええ、勿論…それは、ラッセンと一緒に、です……

その時、不意に二人の胸の中で『何か』がはつきりと湧き上がっ てきました。その『何か』は《声》になって、アンジェレッタとラ

ッセンに話しかけています……

(きつと、行けるんだ。… アンジェレッタと一緒に……)

ええ、そうです。きつと、そうなんです。

『時間』の無い世界に、『いつか』なんてありません。ですから、『いつか』行くことが出来るのなら、それは行かなくてはならない時に、必ず行くことになるんです。

そして、アンジェレッタもラッセンも、あの山へと行かなくてはならない……そう、『声』は約束してくれました……

青く澄んだ瞳も、黒く輝く視線も、共に白い靄に覗く山並から動こうとはしません。でも、雪に煌く山脈を見つめたまま、無数の黄金色の『言葉』は二人の間を行き交い、音も無く銀色の光を放ち続けています。

指先は強風にも負けず、これ以上無いくらいにしっかりと、互いに絡み合っていました……

『風の山』おわり

11・湖畔の遺跡

どれくらいの間、白く霞んだ太陽の下で、あの雪を戴く山々を見つめていたのでしょうか。

アンジェレッタには分かりませんでした。気付いた時には緑の斜面を駆け下りて、汽車の中に乗り込んでいました。

温かな手を指先に感じながら、アンジェレッタが席に座ったと同時に、汽車は音も無く静かに駅舎から離れていきます。窓から外を眺めてみると、背の低い草に覆われた山が、少しずつ後ろに遠ざかっているんです。

風の柔らかな指に豊かな黒髪を遊ばせながら、アンジェレッタはあの素敵な景色を見せてくれた山を、淡い青に染まっていくまですっと見つめ続けていました。

汽車は緩やかにうねる丘の間を、北へと向かって滑っていきます。やがて、風の舞う峰々は、他の背景の山々へと溶け込み、緑の丘に隠されてしまいました。

何だか、とっても悲しくなつてしまいます。あの素晴らしい風景は、もう二度と目に出ることが出来ないんです。もう一度、見てみたい……いつか、帰ってきたい……でも……

清らかな光が、黒い瞳に溢れてきます。その時、ラッセンの声ですぐ隣で聞こえてきました。

「アンジェレッタ……悲しまなくてもいいんだよ。この世界には、『場所』すら無いんだ。だから、いつでも、必要になれば……あの山に出逢えるはずなんだからね」

「ラッセン……」

その深くて優しい言葉にアンジェレッタは振り返ると、そっとラッセンの腕に額を押し付けていました。

小さく細い肩が、微かに震えています。腕に熱い流れを感じながら、ラッセンはその肩に手を置いて囁きました。

「その時にはね、あの山も姿を変えてるかも知れない…でも、《真実》に比べたら、その姿なんてどうでもいいことなんだよ…」

大丈夫。一緒に行けるよ。忘れずに、信じていたらね……」

ええ、勿論、忘れたりしません。そうです、絶対にあの山上で見た景色と《声》…そして、ラッセンを忘れたりするものですか…

「ありがとうございます…」

いつも、そう言っている気がします。でも、もっともっと、たくさんの事を言いたいんです。なのに、こんな時には、どんなにアンジェレッタが望んでも、声は何一つ伝えてはくれません…それらの事をこそ、アンジェレッタは本当に伝えたいのですが……

でも、アンジェレッタがそう思った瞬間、ラッセンがそつと言ってくれました。

「アンジェレッタ……ありがとうございます…」

ちよつとびっくりしてしまいましたが、すぐに嬉しさが込み上がってきます。小さな胸の中に、黄金色の澄んだ波が満ちてくるんです。その《力》に素直に従って、アンジェレッタは顔を上げました。

健康的になった白い頬に、綺麗な微笑みが浮かんでいます。その笑顔を見て、ラッセンは自分でも驚いたことに、そつとアンジェレッタの額にキスをしてしまいました。

すぐに、透き通るような頬に赤みが差し、その赤みは喉元を下りたかと思うと、次には純白の服の中へと入っていきます。黒く濡れた瞳が下を向き、アンジェレッタは恥ずかしそうに身を縮めてしまいました。

でも、嬉しいんです。とっても嬉しいんです。たった一つの出来事なのに、無数の『言葉』がラッセンの心から流れてくるんです。アンジェレッタには、それがはつきりと分かりました。

だから、はにかみながらも、アンジェレッタはもう一度ラッセンの目を見上げることが出来たんです。

「…ありがとうございます…」

こんな自分を『好き』になってくれて、《本当》にありがとうございます……

アンジェレッタは、それ以上何も言わずに、そつとラッセンにキスを返していました…

空を等しく覆っていた霞が、少しずつ動いています。風の銀色の手でかき回されて、あちこちに濃淡が出来てきてるんです。渦を巻いて流れる白い毛布の隙間からは、やがて深い青空が覗き出していました。

太陽も、汽車の後ろの方でようやく顔を出しています。でも、何だか変なんです。だって、ラッセンとアンジェレッタが山に登り始めた頃にも、太陽は南の空に掛かっていました。なのに、太陽は未だにそこにあるんです。北へと向かっている汽車の中からは、もうとつくに山は見えません。いいえ、それどころか、もう汽車は草原まで戻ってきてるんです。

きつと、太陽はまだまだ西の空に下りたくはなかったんでしょう。淡い緑色の平原を眺め、時々現れる灌木に目を止めながら、何だかアンジェレッタは眠くなってしまいました。

まるで、夢の中にいるような気分です。アンジェレッタは、柔らかな笑顔を大切なラッセンに向けながら、そう口にしていました。「これが全部『夢』なら、僕達もそうかも知れないね…」

その言葉を聞いて、アンジェレッタはちよつとびっくりしていました。

それは困ります。『夢』ならいつか覚めてしまうのではないでしょううか。ラッセンとも、一緒にいられないかも知れません。いいえ、一緒にいたいと思っっている、この『自分』さえいなくなるかも知れないんです……

『夢』と『自分』の《差》なんて、何処にあるんでしょう？ やっぱり、こうしてアンジェレッタと同じ大きさになっているラッセンも、『夢』なんでしょうが……

(でも…)

ええ、例え『夢』のラッセンでも、アンジェレッタは一緒にいた

いんです。それが覚めないのなら、アンジェレッタにとっては、自分達やこの世界が『夢』であつても別に構いませんでした。

でも……《本当》にこれが『夢』なら……

…覚めることはないんでしょうか？

少し前に、アンナさんはアンジェレッタが望まない限り、『夢』は覚めたりしないと言ってくれました。でも…何故か、不安なんです。アンナさんを信じていないわけではありません。いいえ、アンナさんの言葉は、信じるとか信じないとか…そういうものではないんです。

でも、アンジェレッタには、その言葉の《本当》の『意味』を知る事が出来なかったのでしょうか。

…いいえ、『本当』の『夢』を前にして、戸惑っていたのかも知れません。

何だか、急に眠れなくなつてしまいます。

なかなか下りようとはしない太陽と、その光に照らされた草原とをぼんやりと見つめながら、アンジェレッタはずっと考え込んでしましました。

ちつとも太陽が動こうとしないので、もうどれくらいの間、こうして草原の中を走っているのか分からなくなっています。何処までも透き通った青い空の中でも、点々と白く輝く雲がじつと流されずに漂っているんです。後ろへとあつと言う間に滑っていく草原では、木々の影が少しも転がってはいませんでした。

動いているのは、この汽車と風だけです。でも、この汽車も風も、ずっと止まっていることなんて無いんです。それは、ずっと静止していることと変わらないのかも知れません。

ラッセンは、そんなことをぼんやりと考えながら窓の外を眺めていました。

青白い花が、線路に沿って並んでいます。その向こうでは、明るい若葉色の草々が、そよ風になびいて白や黄の可憐な花を時々隠しているんです。春に萌え出た葉を失っていない樹は、そのしなやか

な枝を風の子ども達に遊ばせながら、小さくなるまで汽車を見送って来ていました。

その時、行く手に何か灰色のものが見えてきたんです。あれは、いったい、何でしょう……ラッセンは、黒い瞳をじっと凝らして見つめていました。

草の海の上に、灰色の円柱が立ち並んでいます。建物の柱でしょうか。次々に、幾つも見えてくるんです。黒いくらいの青空を背にして、灰色のくすんだ列柱は、汽車を阻むかのように立ち並んでいました。

「何かしら……」

アンジェレッタも、少し考え事を止めて窓の外に首を出しています。二人が顔を見合わせて、再び視線を前に向けた時、アンジェレッタもラッセンも同時に声を上げていました。

「あっ！」

崩れかけた柱の群れの足下に、青く深い湖が見えてきたんです。白雲を写している波一つ無い静かな湖面は、まるでもう一つの空みたいですよ。

アンジェレッタとラッセンが互いの瞳を見つめた瞬間、二人はまた驚いて叫んでしまいました。

いつのまにか、二人はしっかりと手を握りあったまま、汽車から降りていたんです。短い草が、そっと足首をくすぐっています。心地よい香りが辺りに漂い、相変わらず空の上の方で輝いている太陽と共に、呆然としている二人を温かく包み込んでいました。

目の前には、向こう岸なんて全く見えなくらいに大きな湖が広がっています。その岸边には、青草に囲まれて古い石の柱がたくさん並んでいるんです。

……なんて静かなんでしょう……湖面には、漣一つ見えていません。風にさえ、まるで動こうとしないんです。湖は、ただ、そこに存在しているだけでした。

この、すぐ傍にある列柱だってそうです。影一つ動かさず、物音

一つたてるわけでもありません。この柱も、昔は誰かの家だったのでしょうか。それとも、市場を囲んでいたのかも知れません。アンジェレッタの目には、かつてこの柱の下で歩いていたであろう人々の姿が見えるようでした。

でも、それだって静かなんです。今は、この柱だって、黙って一人で立っているだけです。何処か懐かしいのに、アンジェレッタとラッセンにとって、この風景はあまりにも孤独でした……

その時、思っただけです。こうして湖畔に立ち尽くしている『自分』だって、ここに存在しているだけなんです……この遺跡が、すでに終わってしまった『夢』の名残であるなら……『自分』との違いなんて、いったい何処にあるのでしょうか？

ちよつと視線を落とした先に、しっかりとつないでくれているラッセンの手が見えています。……そうです。確かに、『自分』も『夢』なのかも知れません。でも、この遺跡とは違うところが一つだけあるんです。

ええ、アンジェレッタは孤独ではなかったんです。

でも……やっぱり、いつか、この遺跡のように『自分』の『夢』は終わってしまうのかも知れません。それが悲しくて……いいえ、恐くて……アンジェレッタはラッセンをそつと見上げていました。

ラッセンは、にっこりと笑いかけてくれます。そして、優しく頬に手を添えてくれました。

「アンジェレッタ……『夢』には終わりなんて無いんだよ。ほら、見てごらん。この石の柱は一度終わった『夢』だけど、それは今、僕達の『夢』の中に存在しているんだ。だからね、多分……僕達も、誰かの『夢』の中に存在しているのかも知れないよ」

「ラッセン……」

ええ、そうかも知れません。そして、『夢』が『夢』の中で続くのなら、それは無限に続く《永遠》なのです。いいえ、それは続く続かないの判断さえも越えたものなのでしょう。もしもそうなら、決してこの『夢』は覚めたりしないんです。

少し、嬉しくなってきました。でも、ちょっぴり、まだ心配なんです。そんなアンジェレッタの心を観て、二人を夢見ている《存在》はこの静かな『夢』の《本当》を少し示そうとしました。

まるで動こうとしない青い湖面は、何も変わらずに広がっています。でも、『何か』が動き始めているんです。アンジェレッタもラッセンも、その『何か』に気付くと、息をのんで次の動きを見守りました。

不意に、水面から微かな歌声が湧き起こってきます。澄んだ『言葉』は、緩やかなメロディーに乗って青空へとどんどん昇っていくんです。でも、アンジェレッタに届けられた歌声は、決して『音』ではありませんでした。あの、心の奥から響いてくる《声》のようです。それに……ちよつとアンナさんの『言葉』にも似ているかも知れません。

二人には、とつても残念なことに歌声の意味は分かりませんでした。でも、優しく柔らかな力が胸の中に広がってくるんです。……ええ、今ではアンジェレッタにも分かっていました。この風景は、この『夢』は、今もまだ続いているんです。『夢』には終わりなんてありません……少し姿を変えるかも知れませんが、それは常に『たった一つ』なんです。

アンジェレッタがそう思った瞬間、歌声に導かれるように遺跡の柱の群れが輝き始めました。月の光のように銀色の透明な煌きは、柱の内側から溢れ出し、汚れた表面を走ったかと思うと……

「……！」

柱の中の銀色の光は、次の瞬間、大きく弾けていました。すぐ傍らに立っていたアンジェレッタとラッセンはもちろんのこと、辺りの大気も《永遠》の輝きに飲み込まれてしまします……

その、とつても力強く温かな光の渦に抱かれながら、二人はそつと幸せそうに目を閉じていました。

『湖畔の遺跡』 おわり

12・月の家

「……んっ……」

微かな震動が伝わってきます。優しいその揺れは、アンジェレッタの体をそつと包み込んでくれていました。

愛らしい瞼が震え、ゆつくりと青く清らかな光が覗きます。形良く調った指先で目をこすると、アンジェレッタの視界には微笑むラッセンの姿が飛び込んできました。

「目が覚めたかい？ アンジェレッタ」

素晴らしい笑顔が満面に広がってしまいます。心からの幸せに満ちた微笑は、周りのあらゆる存在に喜びを与えていきました。

「……？ ねえ、ラッセン。また汽車が大きくなったのかしら」

ええ、ほんの少しだけ大きく、新しくなった気がします。天井の光は、今や汽車のあちこちから、うつすらと流れ出していました。

「そうみたいだね。でも、やっぱり同じ汽車なんだよ」

「ええ」

しっかりと、まだつながれている手の温もりを感じながら、アンジェレッタは嬉しそうに頷きました。

につこりと、微笑みを交わします。そのまま、二人は一緒に窓の外へと目を向けました。

太陽は、温かくも寒くもない光の腕を伸ばしながら、ようやく西に向かつて転がろうとしているようです。今、その姿は汽車の左手に見えていました。

空には、雲さえ消えてしまっています。何も無いんです。そこには、何処までも広がる、深い青の底無しの海が天を覆っているだけなんです。

汽車の周りには、さまざまな濃淡のある草原が続いています。色とりどりの花が、不意に現れては後ろへと遠ざかっていくんです。今までにも、同じ景色を随分と見てきました。

…でも、何かが違うんです。

「ラッセン…聞こえる……？」

「うん、聞こえてくるよ」

二人の心の中に、少し前に聞いたあの歌が溢れ出し始めるんです。それは、鮮やかな花の群れが通り過ぎる度に音色を変え、美しいメロディーを奏でていきます。胸の中の透明な音楽に耳を澄ませながら、アンジェレッタとラッセンはぼんやりと窓の外を眺めていました。

風が、そんな二人にそつと触れては通り過ぎていきます。銀色の乙女達は、その腕に二人の音楽を抱き締めると、ありとあらゆる存在に聞かせようと、急いで旅を続けていきました。

もう、ラッセンはこの世界の《全て》を受け入れていました。ここに、こうしてアンジェレッタと共にいる…それこそが、ラッセンにとつての《全て》だったんです。それ以外の《本当》はありませんし、それ以上の《真実》もありませんでした。その、『たった一つ』が《全て》であり、その他には何も存在していないんです。

アンジェレッタにしても、同じ気持ちです。周りがどれだけ変わっても、それはただ姿や形が変わっただけなんです。それは結局、『たった一つ』でしかありません。それらは全て、ラッセンと一緒にいることから生まれるんです。アンジェレッタにとって、それらはラッセンと『同じ存在』でした。

そして、二人が一緒にいるからこそ、この世界は存在しているんです。『二人』こそ、実は『たった一つ』なんです。

アンジェレッタの細くしなやかな指先は、ラッセンの逞しい指としっかりと絡み合っています。そこから銀色の月は生まれ、二人の心の中へと流れ込んでいくんです。

ええ、そうです。ここにこそ、《全て》は存在していました……

まるで何かに呼ばれているように、汽車は西の空に向かって走っ

て行きます。太陽も、やつと半分まで落ちていました。でも、ちょっと休憩しているように思えます。それとも、まだ西の地平線には沈みたくないんでしょうか。

何かが、この行く手に待っている気がします。今までは、景色の方が二人に近付いてきたんです。でも、今度は違います。何かがアンジェレッタとラッセンを待ってくれているんです。今度は、そこへと向かって、二人が近付いていく番でした。

その時、急に汽車の速度が落ちました。ええ、ほんの少しでしたが、何処かに停まるうとしているみたいなんです。

アンジェレッタとラッセンは、互いの瞳を覗き込むと、次には窓の外に身を乗り出していました。

陽光に照らされ、汽車の向かっていく先には濃い緑色をした森が横たわっています。枝の先端に広がる若葉が、きらきらと鮮やかに輝いているんです。一つではない、さまざまな緑に染まるその森は、北から南へと草原の中を壁のようにずっと伸びていました。

「すごいね。ねえ、アンジェレッタ。あの森の中には何があると思う？」

ラッセンの声が、耳元を通り過ぎる風のおしゃべりにも消されず、心まで届いてきます。アンジェレッタは、楽しそうににこりと微笑むと、ラッセンに応えていました。

「とても明るい木漏れ日の中を、きつと、綺麗な小鳥達が歌っているわ」

「きつと、そうだよ。それに、おいしそうな木の実も、たくさん落ちてたらしいな」

アンジェレッタは、そんなラッセンの言葉にくすくすと笑い出しています。ラッセンも、その澄んだ美しい音色に合わせて笑い声を上げていました。

森は、刻一刻と二人の汽車に近付いてきます。ほら、鮮やかな色の服を着た、可愛い小鳥達が見えてきました。青くて長い尾をしたものや、赤くて眩しい胸をした小鳥達がたくさん舞っている

です。その数は、汽車が森の中に入ると、もつともつと増えていきました。

とても太い幹をした木々が、頭上のずっと上の方まで真つ直ぐに伸びています。その先で枝がぱあーと花開き、淡い黄緑の葉が微妙な濃淡を描きながら広がっているんです。その緑の天井から、光の泡粒は二人の髪の毛へと降り注いでいました。

斜めに射し込む光の薄い幕に溶け込み、小鳥達は軽やかに飛んでいきます。その小さな体からは、澄み切ったさえずりが次々と零れ出してくるんです。うっとりするような、その柔らかな音色に耳を澄ませながら、アンジェレッタは瞳を軽く閉じてしまいました。

木々の下を、無数の小鳥達が渡っていきます。その影が通り過ぎる下生えの間には、大きくて丸い木の実がいっぱい散らばっています。その木の実を避けながら、ガラスのように透き通った小川が汽車に寄り添ってさらさらと流れていました。

「あの小川は、きつと湖につながってるんだよ」

ラッセンの声に目を開けると、アンジェレッタも美しい小川の水を見て嬉しそうに頷きました。

「森を出たら、大きな湖が広がっているのね」

「水鳥の群れがいて、魚もたくさん跳ねてるんだよ」

ラッセンの言葉が終わらないうちに、ゆっくりと走る汽車は突然森の外に飛び出していました。

ちよつと眩しくて、瞳を一瞬閉じてしまいます。でも、すぐに目を開いた二人は、そこに広がっていた景色に息を飲んでしまいました。

青く澄んだ、それは大きな湖が線路の南に広がっていたんです。森の木々は岸边まで押し寄せていて、漣がその太くて滑らかな幹にゆらゆらと光の波を映しています。汽車の下からは、白く輝く砂浜が波打ち際まで続き、その沖合いでは水鳥達の群れがのんびりと漂っていました。

風に遊ばれ、波が優しく打ち寄せています。心地好い音楽が空中

に満ち溢れ、その水の囁きは楽しい笑みを導いてくれるんです。胸の中から溢れる二人の笑い声に合わせて、湖面では魚達があちこちで飛び跳ねていました。

「素敵な所ね…」

「今度は何があると思う？」

「ラッセンは、何が見えてくと思うの？」

ふわっと零れる素晴らしい笑顔に、ラッセンはにこにこして言いました。

「そうだね。牛がたくさんいる、真っ青な牧場じゃないかな」

その言葉が空中に散った瞬間、大きな湖は終わり、目の覚めるような若々しい草に覆われた牧場が広がっていました。

窓のすぐ下では、湖から溢れ出した小川が、やっぱり汽車の進む方向へと流れていきます。その水面に頭を垂れた青草は、南北の地平線までずっと広がっています。豊かな牧場の中には点々と白斑が散らばり、温かな日差しの中でのんびりと草を食んでいます。

そんな牛達を見ている二人の耳に、不意に風が美しい鈴の音を届けてくれます。カラン、コロン…ゆったりとした音色です。アンジエレッタには、牛の首に下げられている、鈴の揺れる様子が目に見えるようでした。

心が、この素敵な青空へと溶け込んでしまいそうです。柔らかな鈴の音色を近くに、遠くに聞きながら、ラッセンはぼつりと呟いていました。

「馬に乗ったら、こんな気持ちになるのかな…」

頬に当たる風を感じながら、夢を見るような口調でラッセンは囁いているんです。アンジエレッタも、そんなラッセンを見上げて頷きました。

「とても気分がいいわ」

その時、急に二人の視界に二頭の駆けている馬が飛び込んできました。驚いて牧場を見ると、そこには純白の体を輝かせた馬が軽やかな足取りで走っていたんです。汽車と競争でもするように、銀色

のたてがみをなびかせ、楽しそうに跳ねています。ひづめはしつかりと大地を叩き、馬体は陽光によってその煌きを微妙に変化させていました。

わくわくしてきます。なんて素敵なんでしょう！ もう、すっかりアンジェレッタとラッセンは二頭の馬とお友達になっていました。でも、残念なことに、汽車の方がちょっとだけ速かったんです。馬は、少しずつ後ろに退がっていき、やがて二人の視野からは消えてしまいました。

今度は、いったい何が現れてくるのでしょうか。アンジェレッタの青い瞳は、汽車の行く手にじっと向けられています。きっと、次は家があるはずです。赤い屋根をした、可愛い家が……

ほら、見えてきました。ええ、考えていた通り、真っ赤な屋根をしています。石を積んだ壁には、白いペンキが塗られているんです。「大きな窓があるだろうね」

ラッセンの言葉と同時に、アンジェレッタの目には大きくて花の飾られた窓が見えてきました。桃色の可愛い花が、窓辺いっぱい咲きほこっています。なんて素晴らしいんでしょう。そうですとも、アンジェレッタが望んでいた家は、ちょうどこんな感じのものでした。

緑の草原に立つ家を見ながら、ラッセンも想像していました。きっと、あの家の裏手には小さな果樹園があって、丈の低いリンゴの木がたくさん植えられているはずです。だって、白い花でいっぱいの果樹園が、とっても似合いそうな家なんですもの。

黒い瞳には、その瞬間、思っていた通りのリンゴの木の青々とした若葉が映っていました。甘くて素敵な香りまでもが届いてきます。緑の葉影では、丸々とした金色のリンゴが、光の泡粒に照らされそっと瞬いているんです。銀色の風は、その葉と実と花を一度につけた木に優しく触れると、辺りに素晴らしい薫りを運んでいました。

「ほら、見て」

アンジェレッタの指差す先では、二人があつたらいいな、と思つた大きな畑が広がっています。そこでは、ニワトリが一生懸命何かをついばんでいるんです。白く輝いているその体は、ちょこちょこと愛らしい仕草で畑地の中を歩き回っていました。

澄んだ水を湛えて、細い小川は汽車を映して流れて行きます。その心地好い瞬きに包まれながら、アンジェレッタとラッセンは顔を見合わせていました。

「こんな家に、住みたいね……」

「ええ……」

勿論、ラッセンと一緒に、です……

心からの《本当》の願いを二人が『言葉』にした瞬間、汽車はゆつくりとその白い家の前で止まってしまいました。

驚いて口を閉ざした二人の心に、深くて優しい女性の声が響いてきます。

……………お帰りなさい…アンジェレッタ…

……………お帰りなさい…ラッセン……

アンナさんの《声》なんです。なんて静かで、大きくて…でも、なんて温かくて柔らかいんでしょう！ アンジェレッタとラッセンがその言葉を胸の中で繰り返した途端、次には二人はさやさやと風に揺れている草の間に立っていました。

すぐ目の前では、明るい日差しに照らされて、白い壁が煌いています。風の歌や甘い香りも、汽車の中で感じていた以上にしっかりと二人を包み込んでくれるんです……

ふと、アンジェレッタとラッセンは、音にならない《声》に気付いて後ろを振り返っていました。

「きやつ……」

アンジェレッタが小さく悲鳴を上げて、愛らしい手で口許を押さえています。もう、そこには汽車なんて無かつたんです。あんなに長い間一緒にいた汽車は、もう何処にも、影も形ありませんでした。いいえ、汽車だけではありません。見れば、今まで続いていた

線路も、そして、これから先に伸びていた線路も消えてしまったんです。もはや、二人の周りには《道》なんて何処にも存在していませんでした。

「やあ、ようやく着いたようだね。ようこそ、レフリゲリウムへ」
何も言えず、動くことも出来なかった二人の背へと、落ち着いた声が届けられます。慌てて振り返ってみると、果樹園の方から黒い髪をした少年が二人に近付いてきました。

澄み切った青い瞳が、アンジェレッタとラッセンを見て、そっと瞬いています。その雰囲気はアンジェレッタに似ていることに気付くや否や、ラッセンは不意にずっと昔の出来事を思い出していました。

「フィオラ！」

「え？」

ラッセンの言葉に、アンジェレッタは呆然として目の前の少年を見つめています。では、このにこやかに微笑んでくれている少年が

……

「…お兄……さま？」

「お帰り、アンジェレッタ……」

「お兄さま！」

そっと手が離れていきます。今まで、ずっとつながれていた細い指先は、ラッセンの手の中から抜け出すと、フィオラの体をしっかりと抱き締めていました。

フィオラも、優しく受け止めています。嬉しくて、嬉しくて……ラッセンはそんなアンジェレッタの姿を見ながら、その頬にいつまでも涙を流し続けていました。

爽やかな風が、そっと優しく触れては三人を包み流れていきます。その風の乙女達は銀色の糸を引きながら、何処までも何処までも……青空の下を舞い踊っていきました……

ちよっと、心が落ち着いてきます。

アンジェレッタは濡れた瞳でフィオラを見上げると、ふわっと優しい微笑みを零していました。

「本当に待っていて下さったんですね、お兄さま……」

「そうだよ、アンジェレッタ。よく来てくれたね」

大きな両手が、細い肩を抱いてくれます。アンジェレッタはその温もりが嬉しくて、また泣き出しそうになっていました。

もう、決して会えるとは思わなかったお兄さま……

「お兄さまと、こうしてお話出来るなんて……」

「レフリゲリウムでは、別に不思議でも何でもないんだよ」

「……ここは、レフリゲリウムと言うのですか？ お兄さま」

アンジェレッタもラッセンも、初めてこの世界の名前を耳にしました。

「そうだよ、《影》の言葉で言えば『重ね合わせの国』になるだろうね。でも《本当》は、この世界もまだ『途中』でしかないんだ。僕達は、重なり合ったもつと大きくて眩しい世界へと入っていかなくてはならないんだよ」

そこで、フィオラは少しだけ寂しそうな顔をしました。

「アンジェレッタ。こうしてせつかく会えたのに、僕は今すぐ旅立たなくてはならないんだ。もつと広い世界に入るように、《声》が呼んでくれたからね……」

「お兄さま……」

アンジェレッタは、びっくりして……悲しくて、ちょっぴり涙を流してしまいました。

……でも、《本当》は分かっています。必ず、お兄さまとは再び会えるんです。『時間』の無い世界では、その間の空白なんて存在しません。

ですから、アンジェレッタはすぐに泣きやんで、微笑みを浮かべることが出来たんです。

「待っていて下さいね、お兄さま……」

「ああ、待っているよ。いつまでも」

フィオラは笑顔でそう言うと、アンジェレッタとラッセンを可愛らしい家の前まで導きました。

「これから、ここが君達二人の家になるんだ。気に入ったかい？」

「うん！」

大きく二人は頷いています。でもその時、ふとアンジェレッタは今まで思いもしなかったことに気付いて呟いていました。

「でも、お母さんやお父さんは……」

ええ、そうなんです。アンジェレッタが戻らなくなれば、悲しむんじゃないでしょうか……

その呟きに、温もりに満ちた微笑みを浮かべると、フィオラは静かに言葉を紡ぎました。

「……分からなかったのかい？」

優しい『言葉』が流れ出しています。

不意に、アンジェレッタとラッセンの胸には、抑えられない期待が、僅かな不安に縁取られながらも、大きく大きくふくらんできました。

「そう、確かに君達は『影』の言葉で言えば『死んだ』んだよ。ラッセンは崖から落ちて……アンジェレッタはベッドの上で……」

……『夢』は覚めたんだ。今こそ、『本当』の『朝』が始まるんだよ」

フィオラの姿が、どんどん薄れていきます。

やがて、黄金色の太陽の光はその淡い微笑みを揺らめかせ、銀色の風がそつと静かに運び去ってしまいました。

……アンジェレッタの指先は、再びラッセンの手を探していました。温かな手が、しっかりと握り締めてくれます。

二人は黙ったまま微笑みを交わすと、互いに手を取り合って、新しい家の中へと駆け込んでいきました……

『永遠』に続く幸せな物語を、二人は今、銀の流れと共に創り始

めたのです……

そして……扉は閉じられました……

『月の家』 おわり

レフリゲリウム

そは 時間の鎖と 久遠の海

二つを結ぶ 黄金の鍵

『レフリゲリウム物語』 おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7407c/>

レフリゲリウム物語

2010年10月8日15時04分発行